

## 7.八幡木津線関係遺跡発掘調査報告

(鞍岡山2号墳・片山遺跡・下馬遺跡)

### はじめに

今回の発掘調査は、京都府建設交通部が実施する主要地方道八幡木津線道路整備促進事業に伴う事前調査である。鞍岡山2号墳は、京都府相楽郡精華町大字下狛小字長芝・大福寺ほかに所在する古墳時代前期～中期の4基の円墳で構成される鞍岡山古墳群の中の1基である。2号墳は、路線帯内に位置するため全面発掘調査を行った。一方、片山遺跡と下馬遺跡は、遺構・遺物の分布状況や遺跡の範囲・性格等の把握を目的として、小規模な調査を実施した。下馬遺跡と片山遺跡は同町大字下狛小字下馬・片山に所在する遺物散布地であり、これまでに土師器・須恵器・瓦器などが採集されているが、遺跡の実態は不明であった。

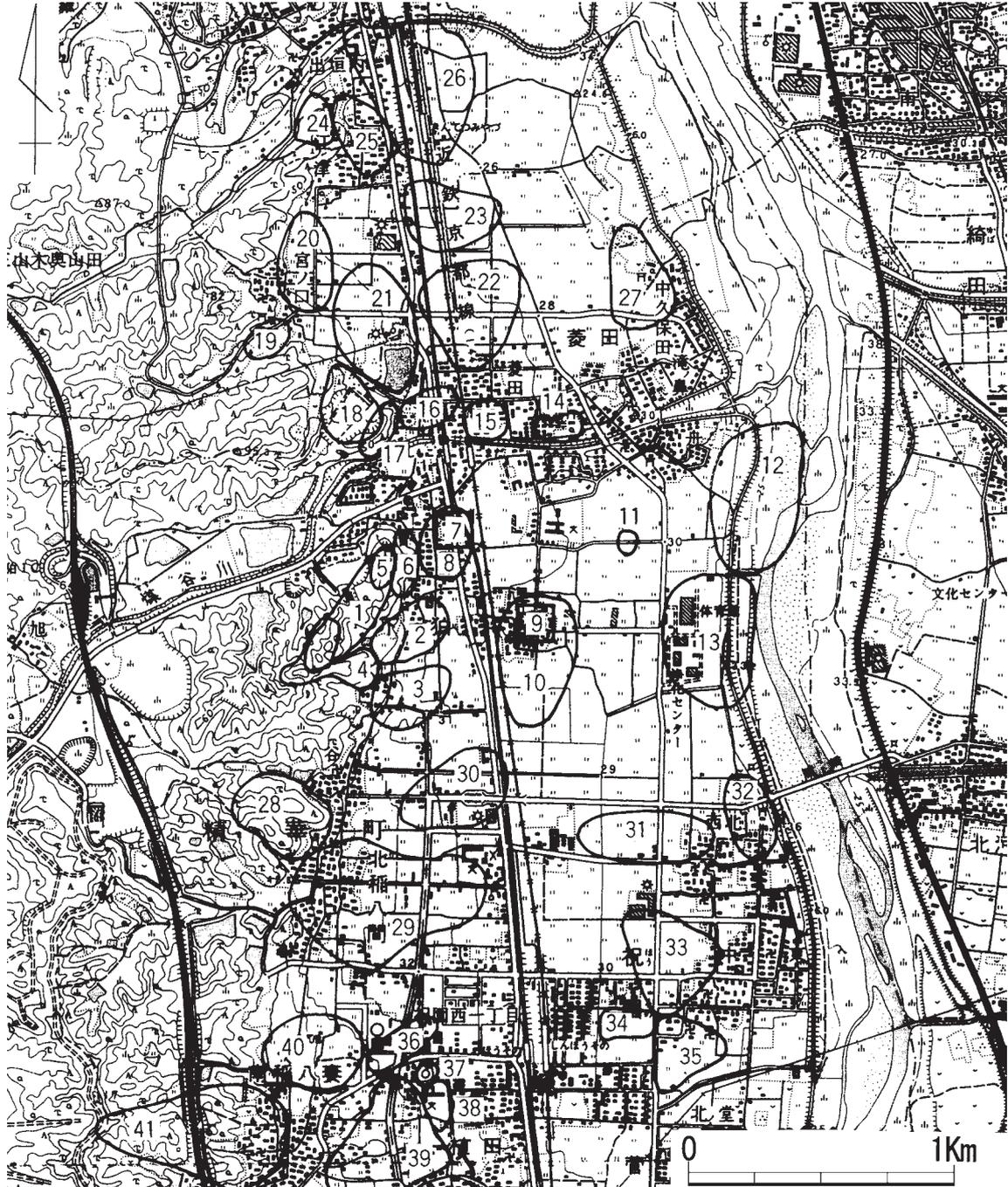
現地調査は、平成20年11月11日から平成21年3月9日までの期間を要し、鞍岡山2号墳については平成21年3月9日に現地説明会を実施し、250名の参加者があった。調査面積は、鞍岡山2号墳とその周辺域が1,000㎡、下馬遺跡が880㎡、片山遺跡が120㎡である。現地の発掘調査は当調査研究センター調査第2課課長補佐兼調査第1係長小池寛、同主任調査員竹原一彦、同調査員石崎善久(当時)、同主査調査員柴 暁彦、調査第3係主任調査員岩松保が担当した。整理報告作業は平成21年度事業として実施し、本文は調査第1係主任調査員竹原一彦及び京都府教育委員会指導部文化財保護課主査石崎善久が執筆した。

調査期間中は、山城南土木事務所・精華町教育委員会など多くの関係諸機関の協力を得た。下馬遺跡の調査では、顕著な遺構・遺物が出土したトレンチは平成21年度に引き続き調査を実施しているために概略の報告にとどめ、詳細については本調査の成果と併せて次年度報告としたい。なお、挿図に使用した座標は世界測地系である。

### 位置と環境(第1図)

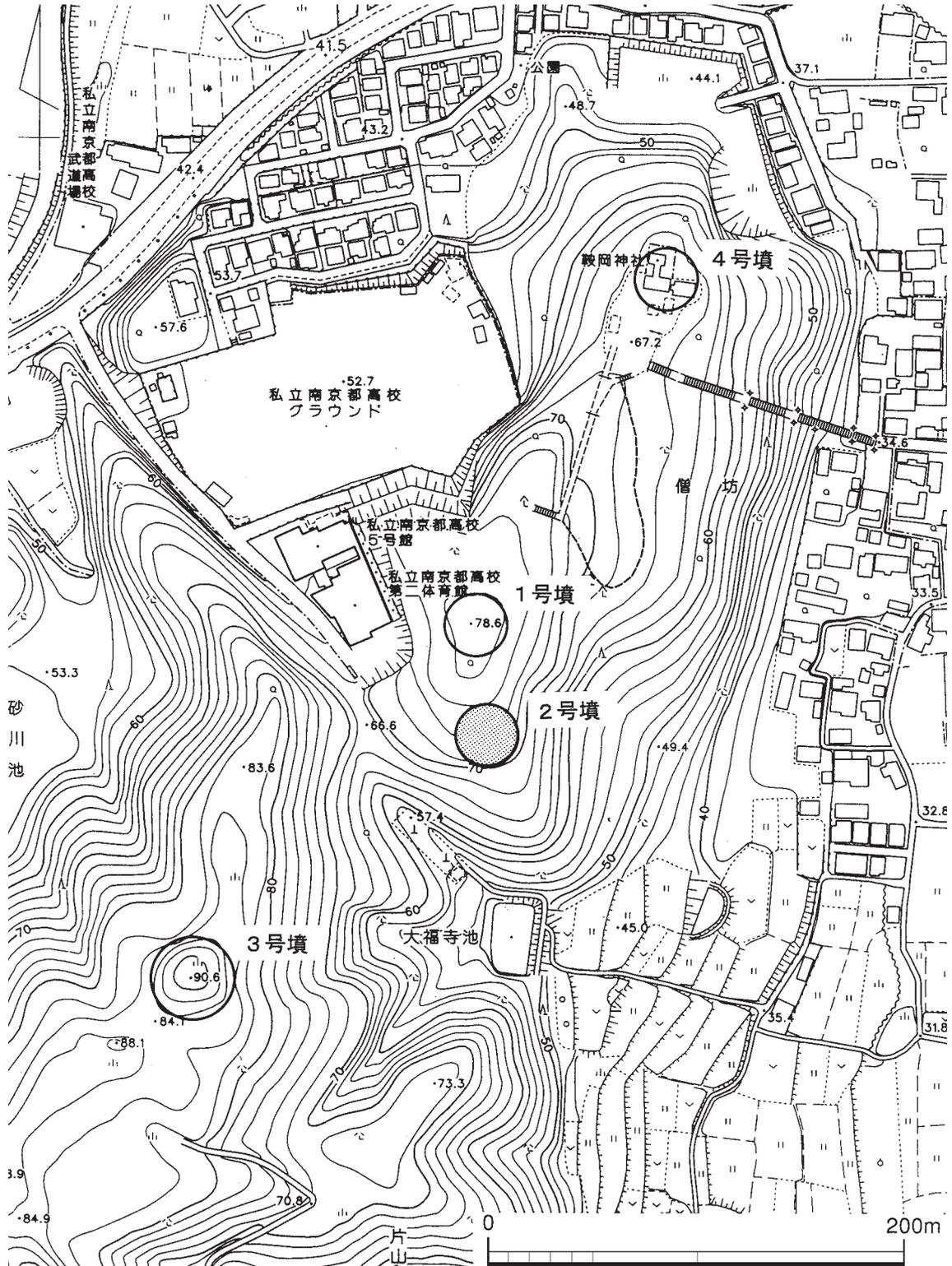
相楽郡精華町は京都府南部の南山城地域にあって、町域の東部は木津川左岸の沖積平野が広がり、中央部以西には奈良県と行政界を接する丘陵が存在する。木津川左岸の沖積平野部は、ほぼJR片町線と近鉄京都線付近を境に、東方の平野部と西方の扇状地に二分される。平野部ではかつての木津川の蛇行を示す旧河道の跡や自然堤防が認められ、特に古い集落は、自然堤防・扇状地・段丘など、それぞれに木津川の氾濫を回避し得る地形条件を求めて立地している状況が窺える。

鞍岡山古墳群・片山遺跡・下馬遺跡は、町域北西部の丘陵上と裾部扇状地に所在する。また、周辺部には縄文時代から中世の各時期の遺跡が数多く分布している。鞍岡山古墳群の南部には弥生時代後期の台状墓や土壙墓、古墳時代後期の土坑を検出した大福寺遺跡があり、縄文時代の石



第1図 周辺遺跡分布図(国土地理院 1/25,000 田辺)

- |                 |           |                  |            |                 |           |
|-----------------|-----------|------------------|------------|-----------------|-----------|
| 1. 鞍岡山古墳群       | 2. 下馬遺跡   | 3. 片山遺跡          | 4. 大福寺遺跡   | 5. 鞍岡神社遺跡       | 6. 鞍岡山遺跡  |
| 7. 下粕廃寺         | 8. 拝殿遺跡   | 9. 里廃寺           | 10. 里遺跡    | 11. 石ヶ町遺跡       |           |
| 12. 百久保地先遺跡     |           | 13. 棕ノ木遺跡        | 14. 春日神社遺跡 | 15. 前川原遺跡(大北城跡) |           |
| 16. 西ノ口遺跡       | 17. 薬師山遺跡 | 18. 平谷古墳群        | 19. 白山遺跡   | 20. 屋敷田遺跡       | 21. 宮ノ口遺跡 |
| 22. 山路遺跡        | 23. 桑町遺跡  | 24. 三山木廃寺        | 25. 佐牙垣内遺跡 | 26. 宮ノ下遺跡       | 27. 元屋敷遺跡 |
| 28. 城山遺跡(稲屋妻城跡) | 29. 北稻遺跡  | 30. 柿添遺跡         | 31. 西垣内遺跡  | 32. 祝園神社遺跡      |           |
| 33. 中垣内遺跡       | 34. 城内遺跡  | 35. 古屋敷遺跡        | 36. 北尻遺跡   | 37. 丸山古墳        | 38. 祝園遺跡  |
| 39. 森垣外遺跡       | 40. 南稻遺跡  | 41. 政ヶ谷遺跡(稲屋妻城跡) |            |                 |           |



第2図 鞍岡山古墳群位置図

匙も出土している。

周辺の遺跡を概観すると、縄文時代では、中世の代表的な遺跡である棕ノ木遺跡で縄文式土器の出土をみているほか、百久保地先遺跡が知られる。弥生時代では、散布地であるが下馬遺跡北側の扇状地に山路遺跡(前期)と西ノ口遺跡(後期)、丘陵上の薬師山遺跡(後期)が存在する。

古墳時代では、調査地の北西の丘陵上に4基の円墳(前期末～中期)からなる鞍岡山古墳群がある。盟主墳である3号墳(中期前半)は直径約40m×高さ約8mを測り、墳丘には葺石と埴輪が伴う。埋葬施設は粘土槨で、盗掘を受けていた。石製模造品や玉類、鉄製品が出土している。大福寺出土とされる甕龍鏡は3号墳出土と言われている。1号墳(前期)は未調査であるが、過去に墳丘裾から埴輪棺が出土している。また、同丘陵では大福寺採集と記された陶棺(大福寺古墳)の存在が伝えられるが、大福寺古墳については位置不明である。近隣での古墳時代集落としては柿添遺跡が知られ、前期の竪穴式住居跡・掘立柱建物跡・溝・土坑が検出されている。

飛鳥時代以降では、平野部に飛鳥時代後期から奈良時代の里廃寺、JR下狛駅の南側丘陵裾部に平安時代後期から中世の下狛廃寺が知られる。下狛廃寺含む一帯は古墳時代後期から奈良時代の拝殿遺跡でもある。丘陵上の鞍岡神社遺跡では磨製石鎌と瓦が採取されている。

中世には遺跡数も増加するが、特に椋ノ木遺跡では掘立柱建物跡・柵・井戸・土壇墓・溝等が検出されている。また、平野部には条里の規制を受けた畦畔・水路・道路の景観が良く残る。

(竹原一彦)

## (1) 鞍岡山2号墳

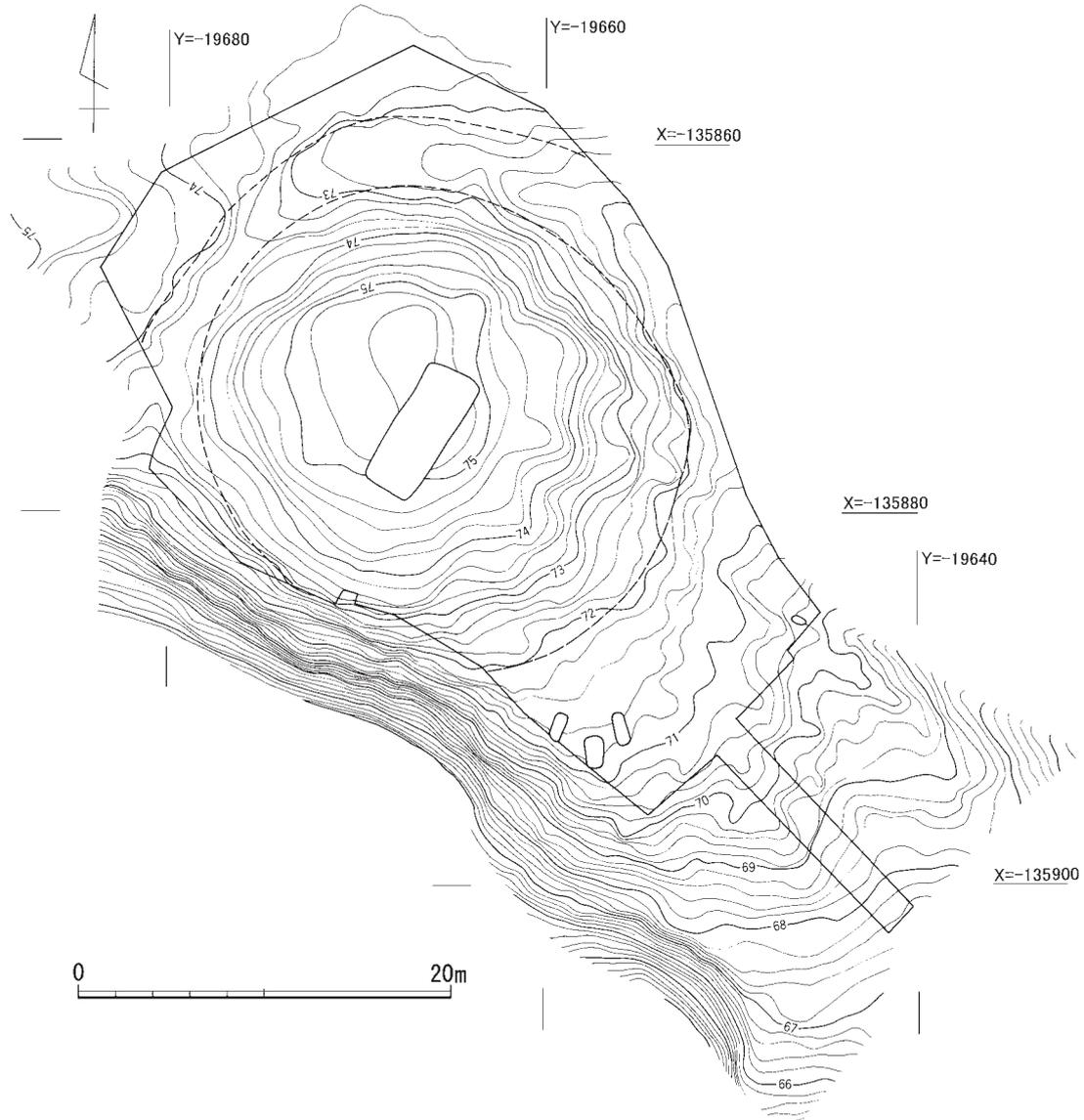
### 1. 立地(第2図)

鞍岡山古墳群は4基から構成される古墳群である。鞍岡山古墳群は生駒山系の東に展開する通称甘南備丘陵と呼ばれる丘陵上に分布している。北の丘陵稜線上端部には遺存状況は悪いものの、鞍岡山4号墳が立地し、その南約200mの丘陵稜線上最高所には、鞍岡山1号墳が立地する。鞍岡山2号墳は、この1号墳の立地する主尾根から南に派生する支尾根稜線上に立地している。なお、鞍岡山3号墳は主尾根を1号墳からさらに南へ約220m離れた丘陵の頂部に位置している。

### 2. 墳丘(第3・4図)

鞍岡山2号墳は、調査前の地表観察によっても、墳丘北側に明確な周溝がみられ、北東および、南西側にも明瞭な基底部と考えられる傾斜変換線が確認された。一方、南側の丘陵斜面側は崖状の急峻な地形を呈している。これは、約30年前の豪雨により、丘陵斜面が地滑りにより崩落したためであることを地元の方から伺うことができた。なお、この南斜面側に関しては、調査時の安全上の理由から掘削を断念せざるを得なかった。墳丘北東側でもわずかに基底部とみられる平坦面を介して急峻な丘陵斜面へと至る。また、墳丘の南東斜面を中心に里道とみられる地形の改変が行われている。

調査は、墳丘南東側の稜線上に位置する平坦面に狭小なトレンチを設定し、遺構の有無を確認し、調査区の設定を実施することから開始した。その結果、墳丘南東部の平坦面からは、遺構・遺物等を検出するには至らず、京都府教育委員会と協議の上、全面的な拡張の必要はないものと



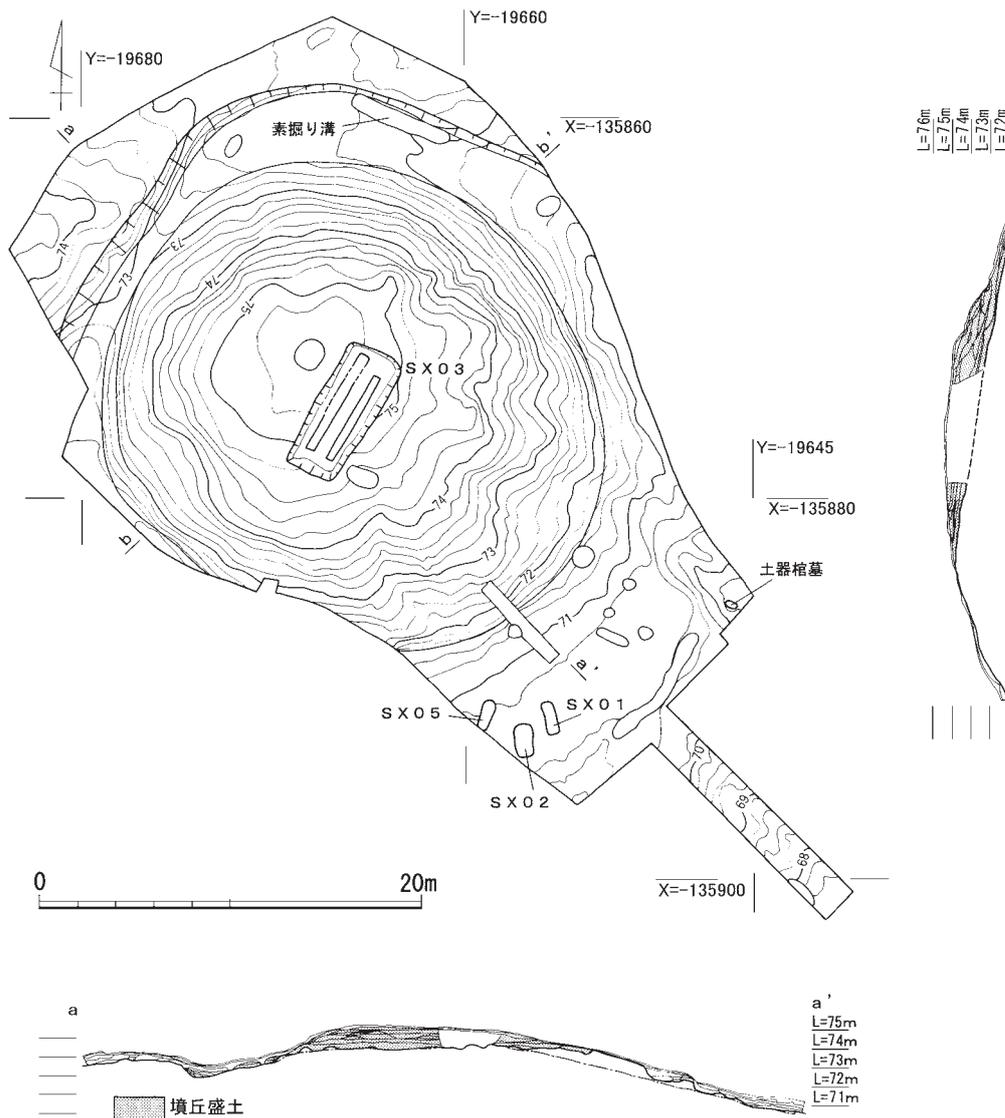
第3図 2号墳調査前地形測量図(S=1/400)

判断され、墳丘裾部を中心に拡張を実施することと決定された。

墳丘の掘削作業は、丘陵主軸方向に沿う形で土層観察用のセクションを設定し、墳頂部平坦面中央でこのセクションに直交する形で、さらに土層観察用のセクションを丘陵主軸に直交するように設定し、表土等の掘削作業を実施した。

調査の結果、鞍岡山2号墳の墳丘は、基底部を地山整形により削り出し、その上に盛土を施すことで築造された円墳であることが明らかとなった。墳丘の造成に際しては、地山面上に旧表土とみられる腐食土層が全く形成されていないことから、旧地形を一定程度改変していることが予測される。おそらく、樹木の伐採、表土の掘削等をまず実施していることが想定される。地山の整形は丘陵稜線方向はほぼ平坦に整形しているが、丘陵直交方向では、当初の自然地形に即した傾斜面が残されている。

基底部となる地山整形は、墳丘北西から南にかけてと、墳丘南東側で行われている。一方、墳



第4図 2号墳調査後地形測量図(S = 1/400)

丘北側は、基底部の整形を地山整形によることなく、盛土を施すことにより実施している状況が明らかとなった。後述する周溝の形状が不整形な点は、基底部削り出しを実施する作業工程が場所によって異なり、丘陵主軸方向の周溝の掘削は、地山整形の段階に実施されている可能性を示唆するものとみられる。

墳丘の造成は、盛土をほぼ水平の単位で積み上げることにより実施している。しかし、丘陵直交方向では水平に墳丘中心部を積み上げた後に、外周側にさらに盛土を水平方向に積み足して、墳丘を完成させているものとみられる。

墳丘北西の後背部には周溝が巡る。周溝の平面形はやや不整な方形を呈している。周溝の断面形は丘陵稜線上に相当する北西側では底がやや丸みを帯びた「U」字形に近い形状を呈するのに対し、墳丘北から北東側では周溝の幅を増し、底面はほぼ平坦に整形されている。また、周溝底面のレベルは墳丘後背部北西側が標高約73mと最も高く、そこから墳丘北東および墳丘南側に向

かい、緩やかに傾斜する。周溝の規模は墳丘裾から計測して、最も幅の狭い北西部で幅約2.5m、深さ約1.0m、最も幅の広い北側で幅約4.0m、深さ約0.4mを測る。

なお、周溝底面の北側で素掘り溝を検出した。規模は長さ5.5m、幅0.8m、深さ0.4mを測る。断面形状は壁面がほぼ垂直に立ち、底面は平坦である。なお、埋土の状況からは自然に埋没したものであると判断された。この溝の性格については明確にすることはできなかったが、掘り込み面が地山直上から掘削されていることと、この溝が周溝の北壁に沿って掘削されていることから、墳丘築造時に掘削された溝である可能性が高いものと判断される。

墳丘の形状は、丘陵主軸方向に主軸をもつやや不整形な円墳である。前述のように、丘陵稜線を最大限利用した形であり、直交方向ではわずかに基底を示す平坦面が作られている。その規模は、稜線方向に約27m、短軸方向は約24m、墳丘の高さは、南東側基底から約3.8m、北西周溝底からの高さは約2.4mをそれぞれ測る。後述する埋葬施設のあり方からみて、墳頂部南東側は盛土が流失しているものとみられる。埋葬施設を中心に復原される墳頂部平坦面の規模は、丘陵主軸方向が10m、直交方向が12mである。なお、段築や埴輪、葺石などの墳丘外部表飾は認められなかった。

なお、周溝内からは円筒埴輪小片数点や二重口縁壺、高杯などの土師器片が出土している。いずれも周溝底面から遊離し、細片化しており原位置を留めているものとは判断できない。特に埴輪片については器壁が著しく摩滅していることと、出土点数が少ないこと、そして埴輪の型式が1号墳のものと同型式であることなどから考えて、1号墳の埴輪が後世に持ち込まれたものであると判断される。一方、土師器については墳頂部から転落した遺物である可能性が高い。

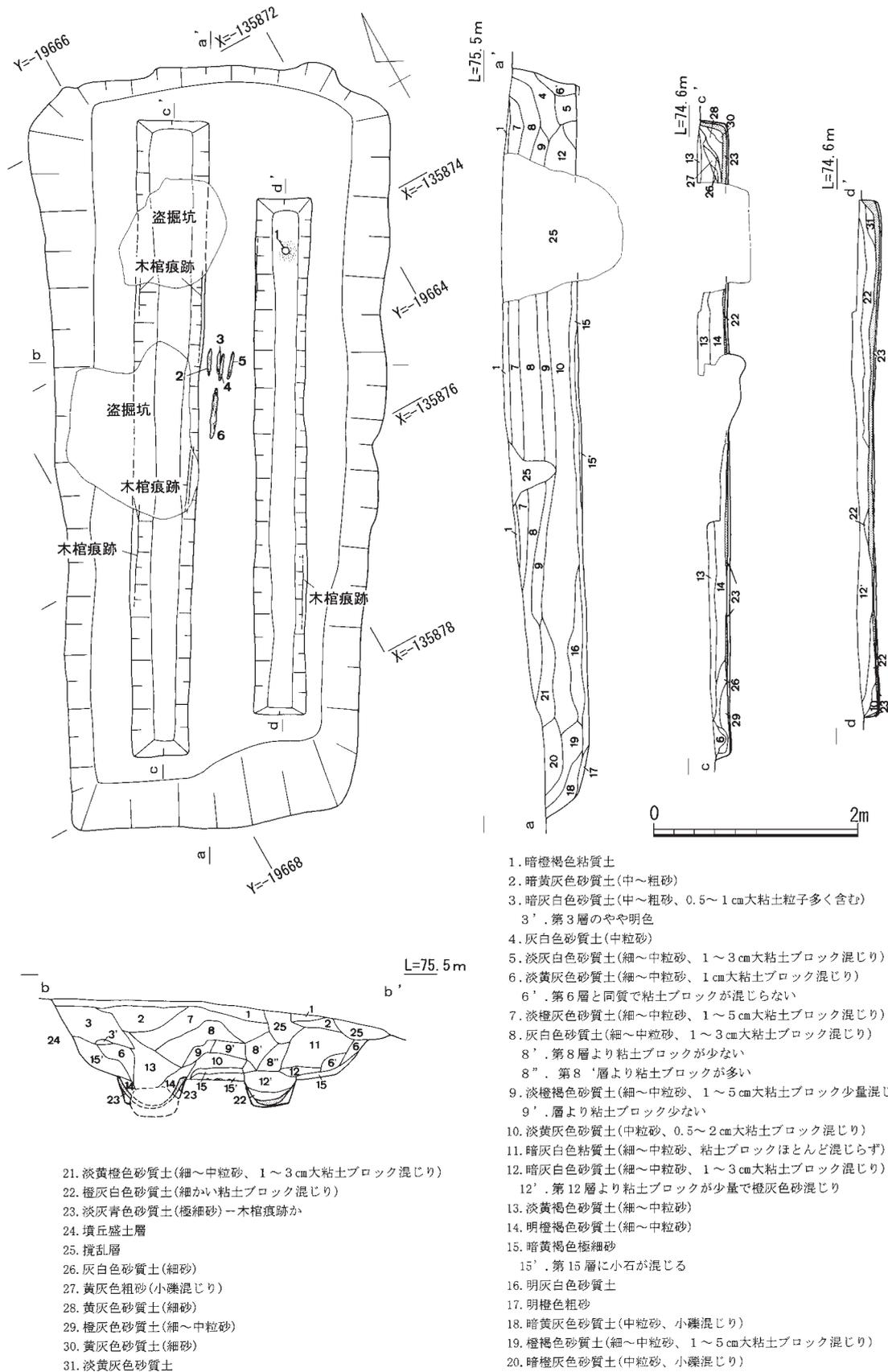
また、墳丘東側裾部分からは、表土掘削中に石釧片(第12図76)が出土した。この石釧については後述する盗掘により、2号墳から掘り出され遺棄されたものである可能性も否定できないが、他の古墳の副葬品である可能性も否定しきれないため、現段階では元位置不明の遺物と考えざるを得ない。

### 3. 埋葬施設(第5図)

2号墳墳頂部では、丘陵稜線直交方向に主軸(N-30°-E)をもつ、木棺直葬形態の埋葬施設SX03を検出した。調査最終段階の断ち割り作業や、周辺部での精査においてもこの埋葬施設以外は検出されていないため、単独埋葬であると判断される。

墓壙は当初想定された墳頂部平坦面中央ではなく、やや傾斜する南東部分で検出された。この点からみて、墳頂部南東側は削平、流失しているものとみられる。墓壙は表土および薄く形成された腐植土層を除去した段階で、その輪郭を検出した。この状況からは、墓壙埋め戻し後にさらに墓壙を覆うための覆土がなされたか否かを判断することはできなかった。

墓壙を検出した段階で墓壙周辺に4基の土坑の輪郭を確認した。その内の2基は墓壙を切り込む形で検出された。当初は近世墓などの可能性を考えたが、掘削を進めるうちにちょうど木棺底と同レベルまで掘削していることなどから、盗掘坑である確証を得た。盗掘坑は当初垂直に掘り



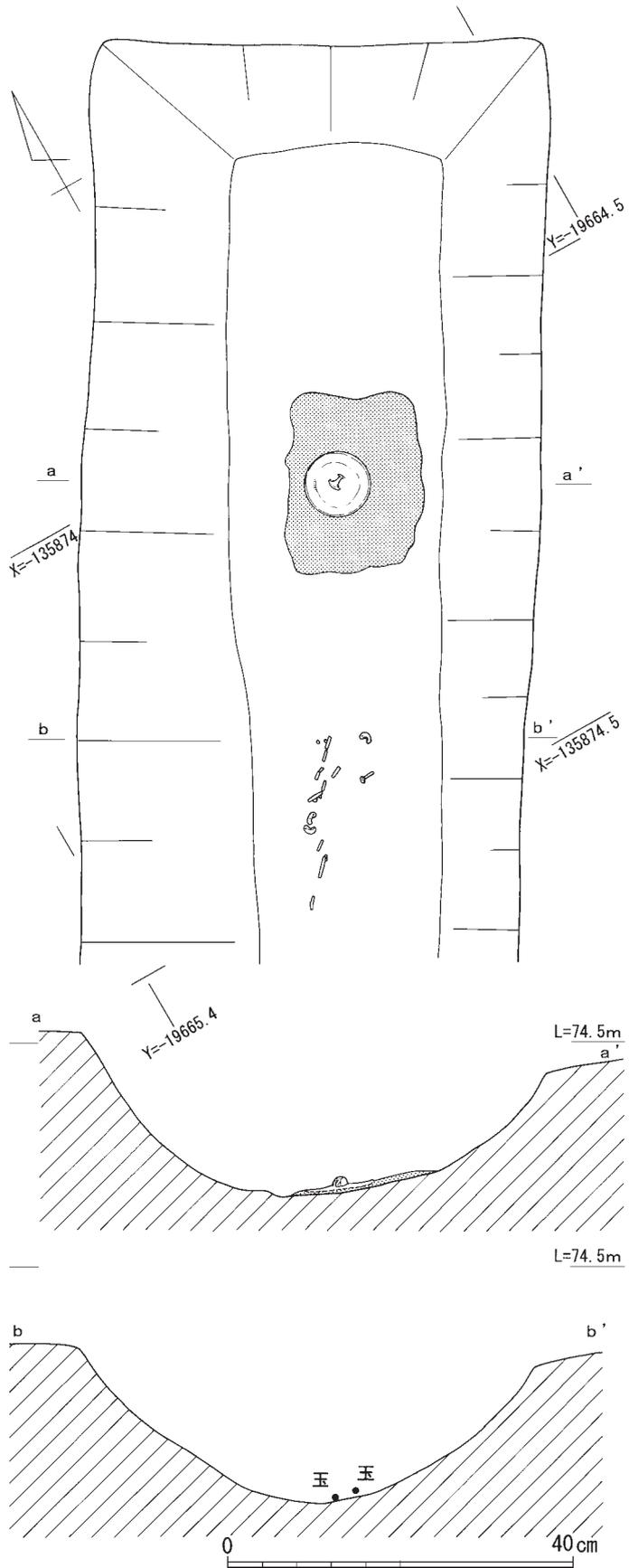
第5図 2号墳埋葬施設 S X 03実測図(S=1/60)

込まれた後、棺底面とほぼ同レベルに至った段階で横方向に拡張が行われている。この状況から副葬品が出土した段階で、さらに副葬品を求め、周辺部分を掘削したものと判断された。

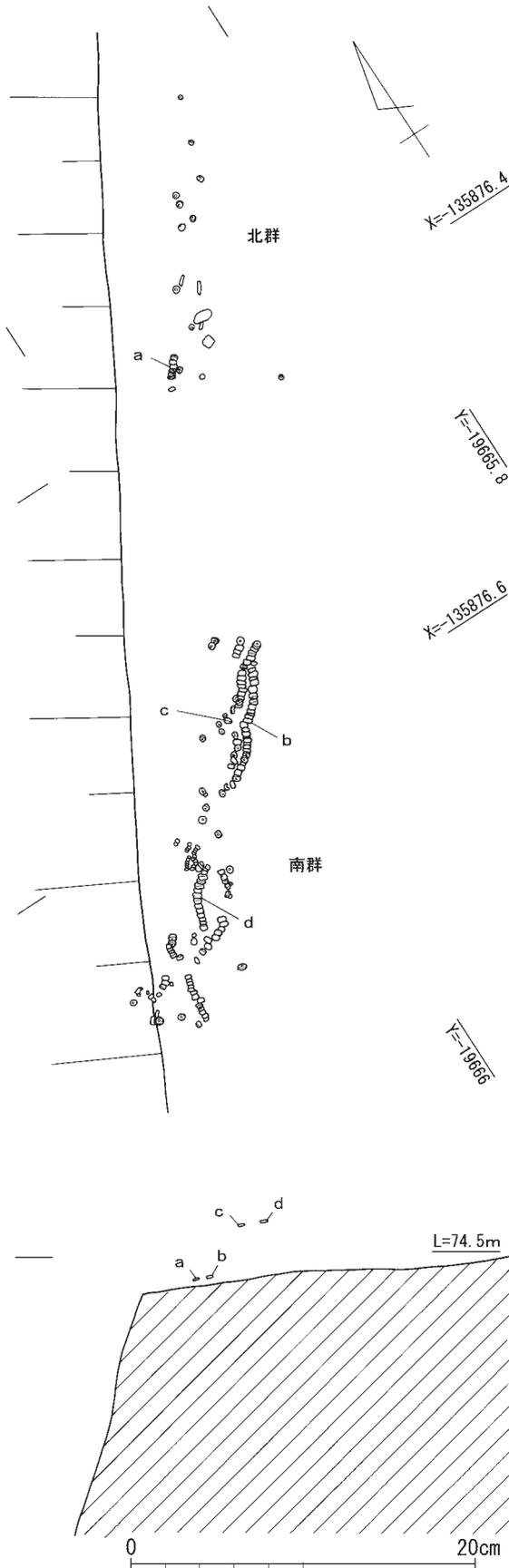
墓壙は平面長方形プランを呈する。北側がやや幅広となる形状を呈する。周辺部分が削平を受けているものの、本来、北側が幅広の形状を呈していたものと判断される。墓壙の掘削は盛土上から行われており、墳丘の造成後に墓壙の掘削が行われたことは確実である。検出時の墓壙の平面規模は、長軸7.5m、北側小口部分幅3.5m、南側小口部分幅2.7mをそれぞれ測る。

墓壙の掘削開始直後に土師器片1点が墓壙南東部分から検出された。他に同一個体とみられる個体や、墳丘各所で出土した土師器との接合関係もみられないため、墓壙上に供献あるいは祭祀行為に伴い遺棄された遺物であるとの確証を得ることはできなかった。

盗掘坑および墓壙の掘削を進めた段階で、盗掘坑側断面に木棺痕跡が存在することが明らかとなった。この段階では、1墓壙1棺の木棺直葬形態の埋葬施設と考えて調査を進めていたため、あまりに木棺が墓壙から偏ることを疑問に思い、切り合い関係の有無があるか、墓壙単軸方向の断面を再精査し観察を行ったが、やはり墓壙は単独であり、切り合い



第6図 埋葬施設 S X03東棺遺物出土状況図 (S = 1/8)



第7図 埋葬施設 S X 03 東棺棺外遺物出土状況 (S = 1/4)

はないものと判断した。

墓壙の掘削を進めた結果、墓壙は墓壙底面に棺を納める部分だけにさらに掘削した、いわゆる二段墓壙であることが明らかとなった。二段目を検出した段階で東西の側壁に沿う形で2基の木棺痕跡を確認した。上述のとおり、墓壙は単独であるため、1墓壙2棺埋葬であることが明らかとなった。以下、東の木棺を東棺、西の木棺を西棺として概略を述べる。なお、東棺側の墓壙南小口部分が、西棺に比して傾斜が緩く削り残された二段目の平坦面が短いことから、棺に合わせた形で墓壙の掘削がなされたものと判断される。

### 1) 東棺

墓壙内東側に位置する木棺である。部分的に棺材の腐食痕跡を確認することはできたが、全面的に木棺腐食痕を確認することはできなかった。そのため、木棺痕跡の掘削に際しては、棺の外法に相当する部分を掘削したものと考えられる。

木棺痕跡は短軸側断面が「U」字状を呈する。また、小口は垂直に立ち上がる。以上の点から割竹形木棺であると判断した。なお、小口板の組み方については、棺身を挟み込む形状であるのか、棺内にはめ込まれたものであるのかの確証を得ることはできなかった。

棺の規模は全長5.1m、北小口で幅0.55m、南小口で幅0.5mを測る。平面的に確認した段階から棺底までの深さは約0.25mである。棺底のレベルは北から南にわずかに傾斜する。

東棺に伴うとみられる遺物は、棺内北小口、棺外中央東側からそれぞれ検出した。棺内北小口部分で棺底に接した形で鏡、玉類の副葬品を検出した(第6図)。鏡周辺は黒変している。また、この部分を中心に赤色顔料が比較

的多く検出された。

鏡は鏡背を上にした状態で、棺中軸より東に寄ったところで検出された。ほぼ棺底に接しており、後述する玉類との位置関係から被葬者の頭位上方に副葬されたものとみられる。

玉類は鏡より南側の位置で、勾玉・管玉等が検出された。やや点数は少ないものの連をなすような状況で検出されていることから、被葬者に装着された首飾りであると判断された。

棺外の遺物として、棺中央東棺側から玉類が検出された(第7図)。玉類は大きく北群と南群に別れており、それぞれの構成や、出土レベルに差がみられる。北群は勾玉4点、ガラス小玉2点、滑石製白玉17点から構成される。各玉はやや離れた位置から出土しているが、玉の構成からみて、北群で一連のものであったとみられる。一方、南群は滑石製白玉195点のみで構成され、出土レベルは北群よりも高い。玉類の検出状況から、この滑石製白玉のみで構成された一連のものであると判断される。

これら、棺外の遺物は、東棺が据え付けられ、周辺に一定の埋土がなされた段階で副葬されたものと判断されるが、棺蓋を施す行程との前後関係については明確ではない。

## 2) 西棺

墓壇内西側で検出した木棺である。部分的に棺材の腐食痕跡を確認することはできたが、全面的に木棺腐食痕を確認することはできなかった。そのため、木棺痕跡の掘削に際しては、棺の外法に相当する部分を掘削したものと考えられる。西棺は盗掘により、棺の北側を中心に大きく破壊を受けている。盗掘の状況から何らかの副葬品を盗掘者が発見したものと推測される。

木棺痕跡は短軸側断面が「U」字状を呈する。また、小口は垂直に立ち上がる。以上の点から割竹形木棺であると判断した。なお、小口板の組み方については、棺身を挟み込む形状であるのか、棺内にはめ込まれたものであるのかの確証を得ることはできなかった。特に南小口部分では、小口板が棺内に倒れ込んでいる状況を確認した。

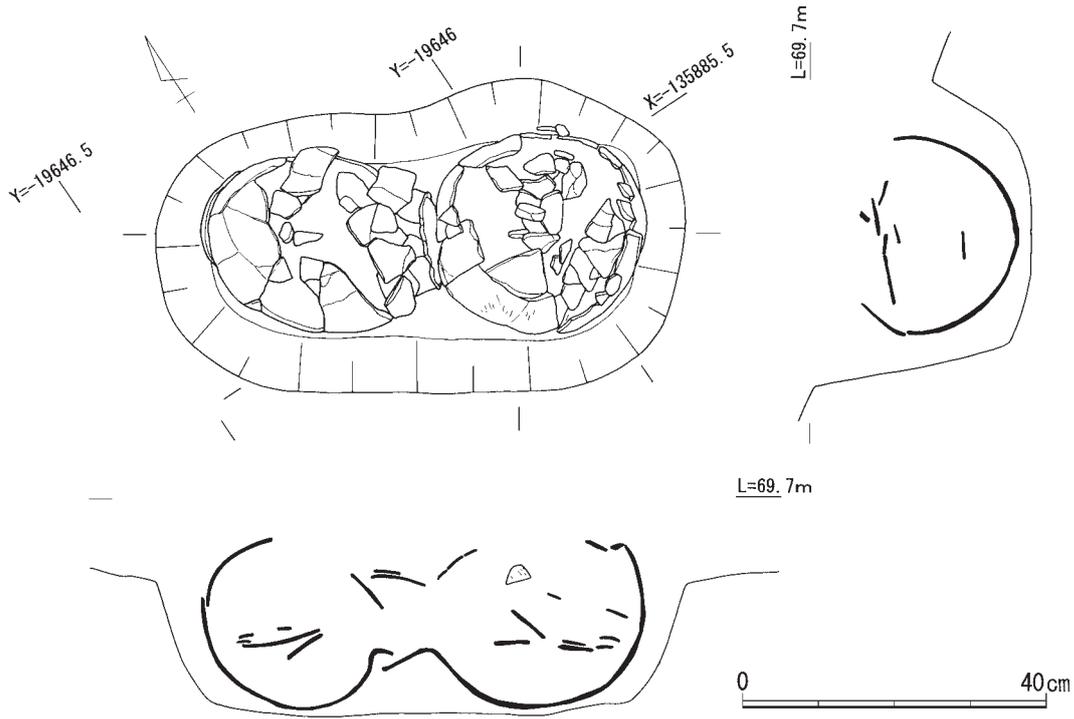
棺の規模は全長6.25m、北小口で幅0.7m、南小口で幅0.55mを測り、北小口が幅広の形状を呈する。平面的に確認した段階から棺底までの深さは約0.3mである。棺底のレベルは北から南にわずかに傾斜する。木棺の規模が東棺に比べ大形であることや、墓壇の規模はこの棺を基準に決定されているとみられることから、この古墳の中心的な被葬者が埋葬されたものとする。

西棺に伴うとみられる遺物は、棺外北東側から鉄製品が検出された。棺内からは棺北小口付近および、南小口付近でわずかに赤色顔料が検出されたにとどまる。

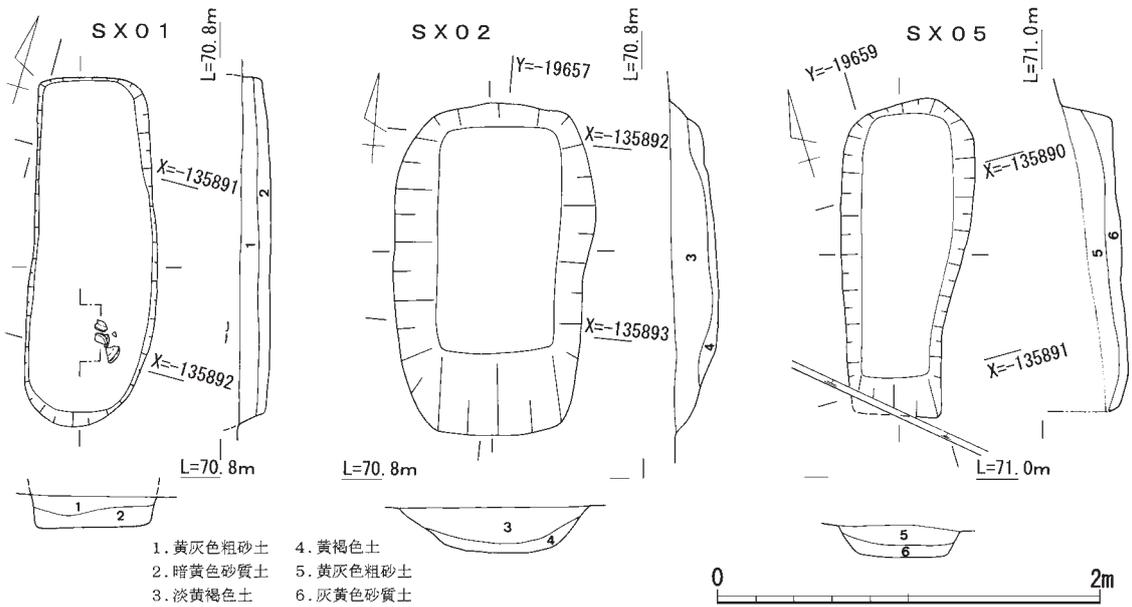
鉄製品は北に切先を向けた小型の鉄剣3点と、南に切先を向けた大型の鉄剣1点が検出された。これら鉄製品は削り残された二段目の墓壇のほぼ直上から検出されており、西棺安置後に副葬されたものと考えられる。また、北側の鉄剣はその出土状況と小型品であることから槍である可能性が高い。

## 4. その他の遺構

鞍岡山2号墳では、上記の古墳に伴う埋葬施設の他に、直接この古墳に伴わない遺構を検出し



第8図 土器棺墓実測図(S=1/10)



第9図 墳丘南東裾平坦面土壙墓実測図(S=1/40)

ている。以下、概要について述べる。

1) 土器棺墓(第8図)

鞍岡山2号墳の墳丘裾から南東に位置するテラス状の平坦面から検出された。この部分には山道が後世に造られているため、このテラス状の平坦面が土器棺墓造墓時に存在したか否かは不明である。墓壙は不整形な長楕円形を呈する素掘りである。東西方向に主軸をとる(N-55°-W)。

2個体の直口壺を合わせ口に棺身として用いたものである。西側に用いた直口壺(第12図80)は口縁を大きく打ち欠いている。この直口壺を東の直口壺(第12図79)に差し込むようにして、棺としている。土器の形状から、2号墳の築造時期と同時期の所産と考えることができる。しかしながら、2号墳の被葬者との関係については、その埋葬位置関係などから直接的な縁故関係があるのかどうかについては、検討を要する。

## 2) 墳丘南東裾平坦面上の土壙墓群(第9図)

2号墳墳丘裾南東部の平坦面では、3基の土壙墓とみられる遺構を検出した。後述するように飛鳥時代の須恵器が墓壙上面から検出されていることから、飛鳥時代の土壙墓群と考えられる。

### 土壙墓 S X01(第9図左)

2号墳墳丘裾南東部の平坦面丘陵稜線主軸からやや南西側で検出した土壙墓である。墓壙は素掘りであり、南小口が丸みをもつ隅丸長方形の平面プランを呈する。規模は長軸1.85m、短軸0.65m、深さ0.17mを測る。主軸は南北方向にとる(N-14°-W)。平・断面の観察からも木棺痕跡を確認することはできず、土壙墓であると判断される。遺物は土壙墓検出段階に南小口部分で須恵器杯1点(第12図76)を検出した。

### 土壙墓 S X02(第9図中央)

土壙墓 S X01の南西で検出した土壙墓である。墓壙は素掘りであり、隅丸長方形の平面プランを呈する。規模は長軸1.75m、短軸1.05m、深さ0.25mを測る。主軸は南北方向にとる(N-5°-W)。平・断面の観察からも木棺痕跡を確認することはできず、土壙墓 S X01と類似した埋土であることから、土壙墓であると判断される。

### 土壙墓 S X05(第9図右)

土壙墓 S X02の北西で検出した土壙墓である。墓壙は素掘りであり、北小口幅がやや広い隅丸長方形の平面プランを呈する。規模は長軸1.70m、短軸0.70m、深さ0.15mを測る。主軸は南北方向にとる(N-16°-E)。平・断面の観察からも木棺痕跡を確認することはできず、土壙墓 S X01と類似した埋土であることから、土壙墓であると判断される。

(石崎善久)

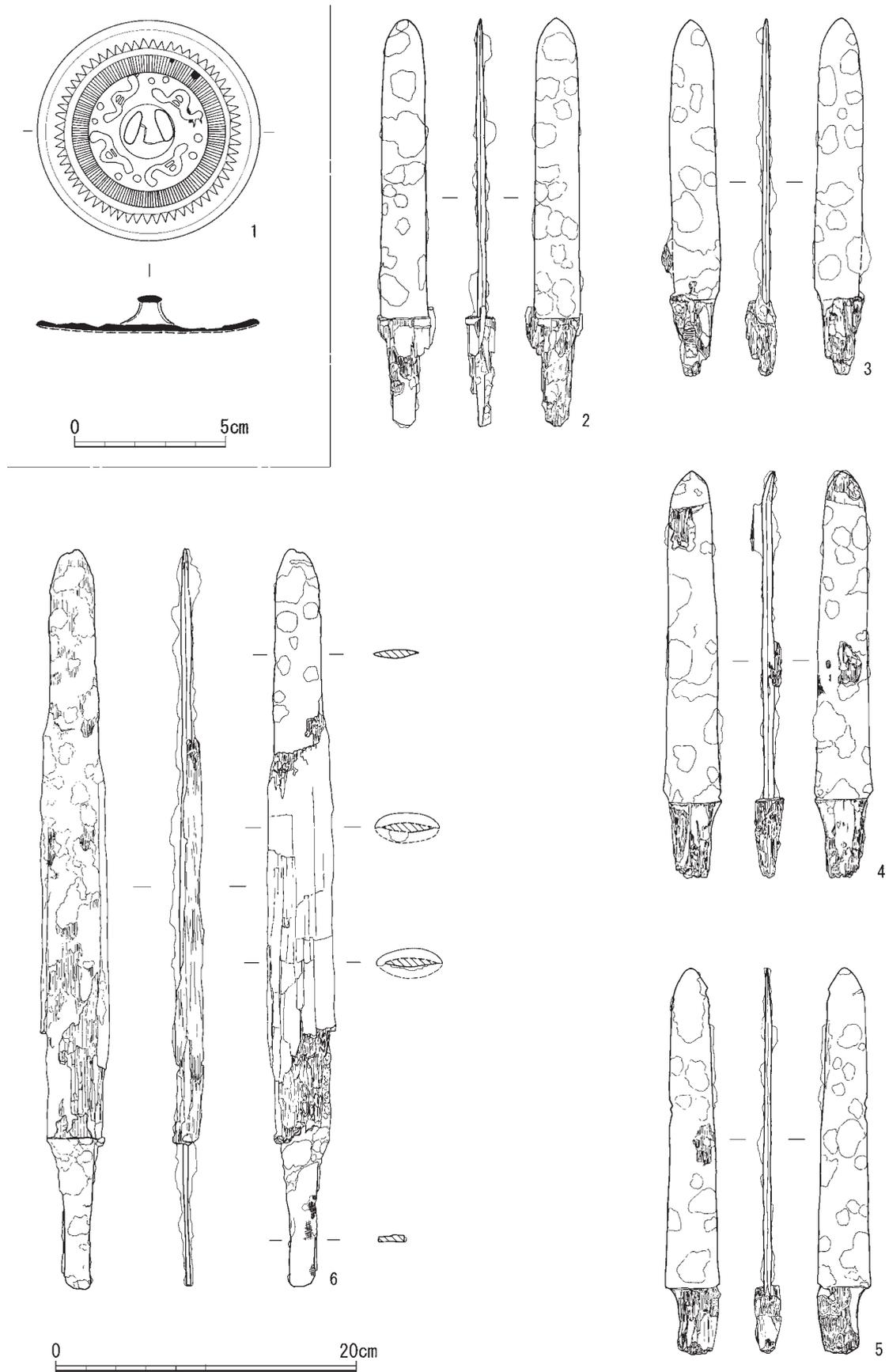
## 5. 出土遺物(第10・11図)

鞍岡山2号墳出土遺物は総数でコンテナ2箱である。残念ながら、墳丘各所より出土した土師器類については、小片で磨滅しており図示することができなかった。以下、遺構出土遺物ごとに概観する。

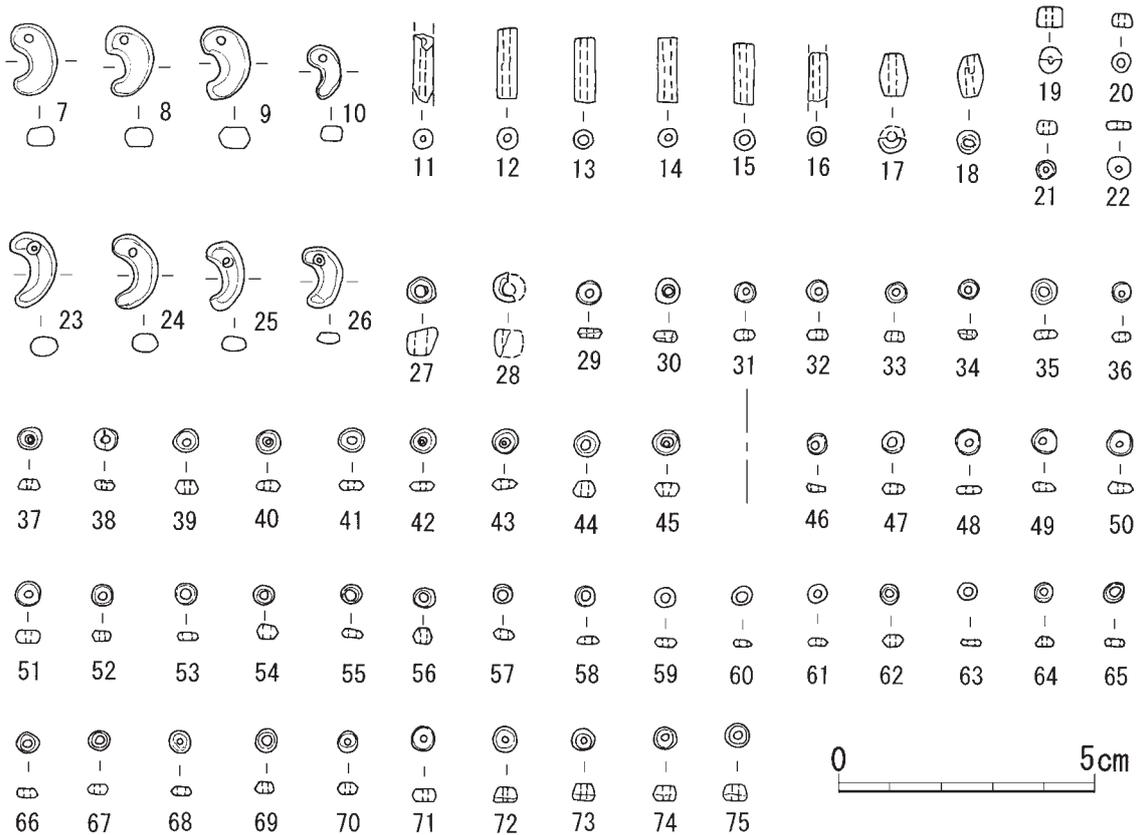
### 1) 鞍岡山2号墳埋葬施設 S X03出土遺物(第10図)

埋葬施設 S X03出土遺物には、鉄製品、玉類、鏡、土師器小片がある。土師器小片については図示することはできなかった。また、玉類については代表的なものを図示するに留めている。

第10図1は S X03東棺内から出土した青銅製の仿製四獣形鏡である。この鏡の直径は7.4cmを測る。鏡背部の中央にやや大きめの紐座をもち、紐座の周囲の内区には半肉彫りの4体の獣が



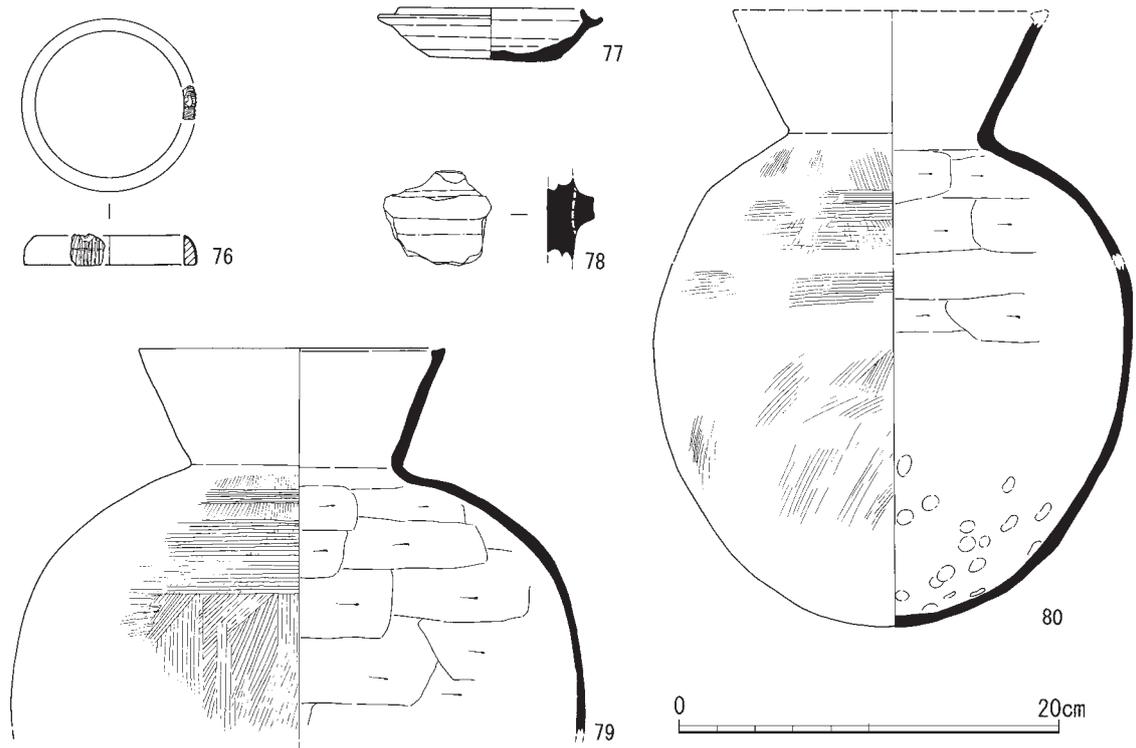
第10図 埋葬施設 S X03出土金属製品実測図



第11図 埋葬施設S X03東棺出土玉類実測図

鑄出される。獣は簡略化されているが、うろこ状の文様もかろうじて確認できる。内区外周には櫛歯文帯を巡らし、平縁部には鋸歯文を配している。鏡背の櫛歯文帯の一部に僅かに水銀朱の付着がみられる。2～6は西棺の東側棺外から出土した鉄製の槍(2～5)と鉄剣(6)である。槍2～5は、形態は剣と何ら変わらず、柄頭は直線的な小口面をもつ。切先が西棺被葬者の頭部方向に向く副葬状況から、2～5は槍と判断した。2は全長27.4cm、刃部長20.2cm、幅3.1cm、厚さ0.5cmを測る。3は全長23.5cm、刃部長18.2cm、幅2.9cm、厚さ0.5cmを測る。4は全長27.4cm、刃部長22.5cm、幅3.8cm、厚さ0.6cmを測る。5は全長25.9cm、刃部長21.3cm、幅3.5cm、厚さ0.5cmを測る。いずれも身部の断面形は凸レンズ状で、鑄は明瞭ではない。剣6は全長48.5cm、刃部長39.6cm、幅3.2cm、厚さ0.6cmを測る。剣身の中央部を中心に木製鞘が残っている。棺底側の鞘は失われているが、残る鞘の状況から断面形は楕円であったとみられる。柄部の一部に布目痕が存在することから、柄の鉄地に布を巻き、木柄に装着していたとみられる。

第11図はS X03東棺棺内と棺側部から出土した装身具である。棺内出土の玉類18点の内訳は勾玉4点(7～10)・管玉10点(11～16)・棗玉2点(17・18)・白玉4点(19～22)である。勾玉と白玉は滑石製であり、管玉と棗玉は緑色凝灰岩製である。白玉は体部中央からやや一方に偏って稜を作り出すものが多数を占める。棺外出土の玉類のうち北群は、総数23点(23～45)で、勾玉4点(23～26)、ガラス小玉2点(27・28)・白玉17点(29～45)である。棺外出土の玉類のうち南群は、すべて白玉で構成され、玉類計195点である。うち30点(46～75)を図化した。



第12図 2号墳墳丘・土器棺・土壙墓出土遺物実測図

第12図76は、墳丘北側斜面下部から出土した緑色凝灰岩製の石釧の破片である。破片が小さく、当初の直径は不明である。幅は1.6cm、下端の厚さは5mmを測る。石釧の斜面と側面はともに細刻線を有している。

杯身77は周辺埋葬施設S X01から出土した。円筒埴輪片78は墳丘斜面から出土した。埴輪の出土は僅かであり2号墳に伴うものとはみられない。79と80は土器棺に使用された布留式の直口壺である。器壁の劣化が著しく、特に薄い体部下半は小破片に別れ、復元が不可能であった。79の口径は16.4cmである。80は概ね口径が16.6cm、器高は32.8cmと推定される。

(竹原一彦)

## 6. まとめ

鞍岡山2号墳は、調査の結果やや不整形ながら盛土により構築された直径約25m、高さ約4mの中型円墳であることが明らかとなった。築造時期は、滑石製玉類の存在や仿製鏡からみて、古墳時代中期前半と考える。また、槍や鉄剣の複数副葬のあり方から、中期前半でも古相を示しているものと考えられる。鞍岡山古墳群の存在する丘陵上には、4基の中型円墳から構成される前・中期古墳が存在しており、2号墳もその規模からみて、これらの系譜に連なる古墳と考える。これらの古墳の編年的な位置づけについては、前期末とみられる3号墳、中期初頭とみられる1号墳、そして中期前半とみられる2号墳に連なる首長系譜を構成する。4号墳については現在のところ情報が乏しく、築造時期を示すことはできない。

また、埋葬施設の特徴として、単一墓壙内に2棺を埋葬することが明らかとなった。このような1墓壙内に複数の棺を埋葬する形態をとるものは、奈良県桜井市磐余池ノ内古墳群のような中規模古墳をはじめ、岐阜県大垣市昼飯大塚古墳や、三重県上野市石山古墳のような大型首長墓にもみられる。また、形態は違うものの、複室構造の棺に複数埋葬を行うものとして木津川市内田山B2号墳のような例も存在する。これらは、形態こそ異なるものの、同一墓壙内に複数の被葬者を埋葬するという原理自体は共通しており、1墓壙に複数の被葬者を埋葬するという事例が決して特殊とはいえないことを示しているとみられる。今後、こうした埋葬方法が何に起因しているのかを考察していく必要があると考える。(石崎善久)

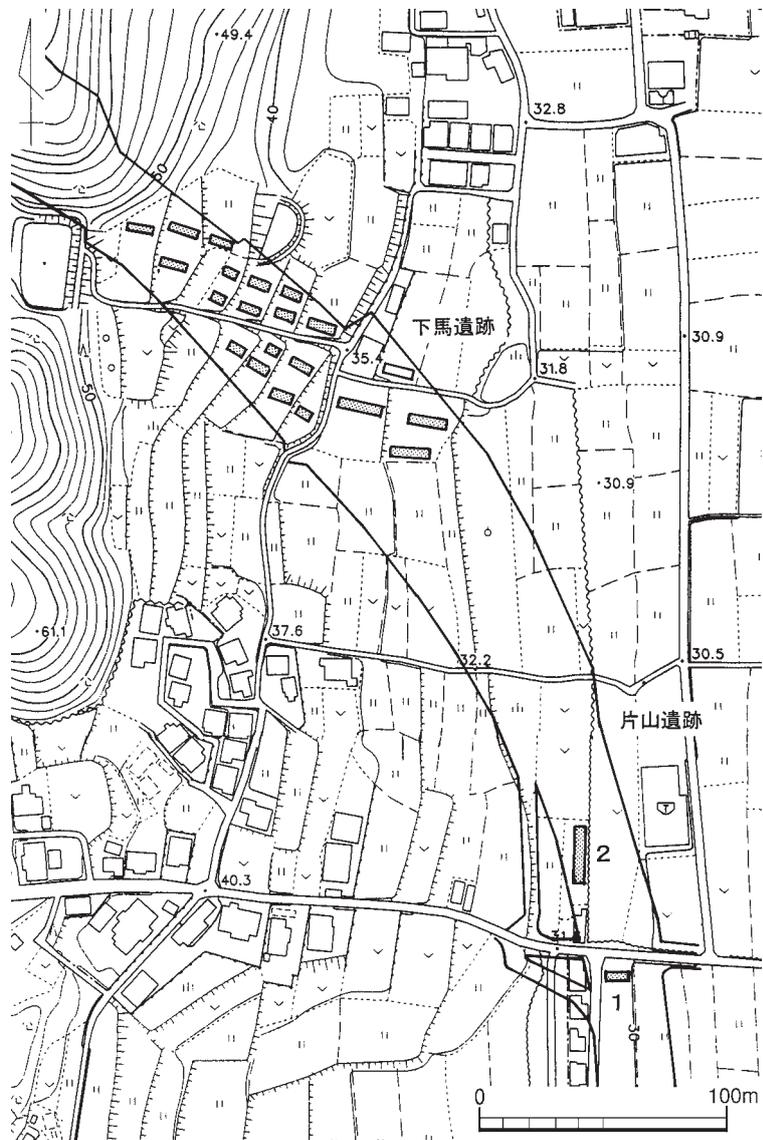
## (2)片山遺跡

### 1. 調査の概要

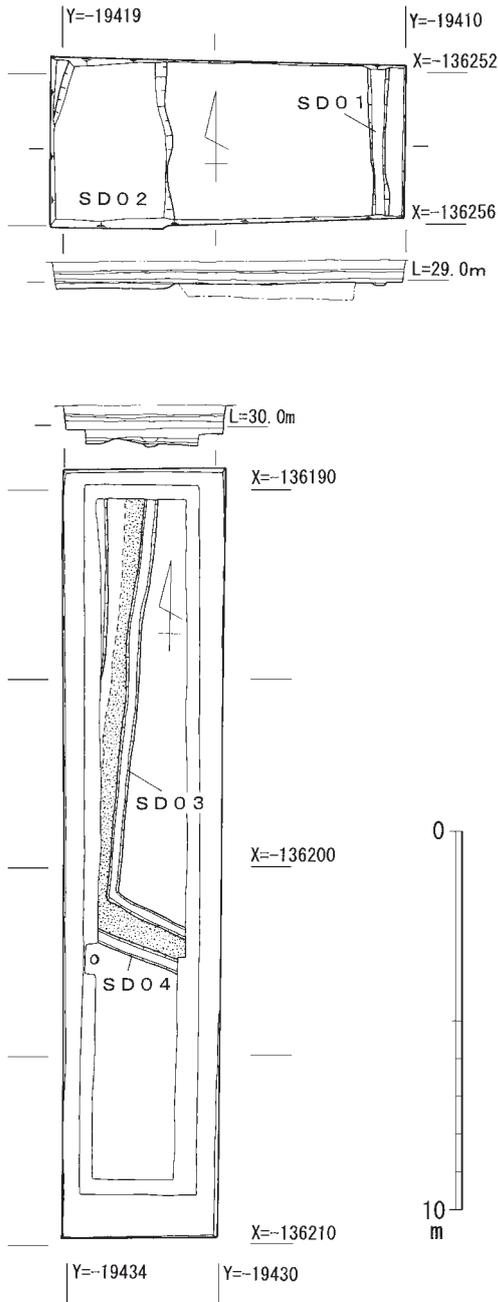
調査対象地の水田2か所にそれぞれ1か所のトレンチを設定した。遺跡の南端に位置する地点を第1トレンチ、道路を挟んだ北側を第2トレンチとした。調査に際して表土の除去には重機を使用し、その後は人力による掘削及び精査を行い遺構と遺物の検出に努めた。

1) 第1トレンチ 東西9.5m×南北4mの東西トレンチである。標高29mにあり、地表下0.6m付近に中世頃の遺構面を検出し、東端部と西端部からそれぞれ1条の溝を検出した。

溝S D01 トレンチ東端部で検出した南北方向の素掘り溝である。溝幅約0.5m、深さ約0.1mを測る。溝内から土師器の破片が少量出土した。



第13図 片山遺跡・下馬遺跡トレンチ配置図



第14図 片山遺跡トレンチ平面図

溝SD02 トレンチ西端部で検出した南北方向の素掘り溝である。溝幅は北端で約2.6mを測るが、南に向かって幅が広がる。深さは約0.2mと浅く、溝底部にはなだらかな凹凸がみられた。埋土は暗灰色砂質土である。溝内から土師器の破片が少量出土した。

遺構面の直上に堆積する遺物包含層(淡灰色砂質土)では、古墳時代中期から近世までの土師器・須恵器・陶磁器等の出土をみたが、いずれも摩滅が著しい状態である。

2) 第2トレンチ 東西4m×南北20.5mを測る南北トレンチである。標高約29.6mにあり、地表下約1.2m付近で水田畦畔の痕跡と2条の溝SD03・SD04を検出した。北壁面で確認した水田畦畔は、幅約0.6m、高さ約0.2mを測り、南南西方向に約11m直線的に延びた後、東南東方向に折れる。調査面では明瞭な畦畔の盛り上がりはみられなかったが、畦畔相当部分の土壤に酸化鉄粒子が集中して確認された。

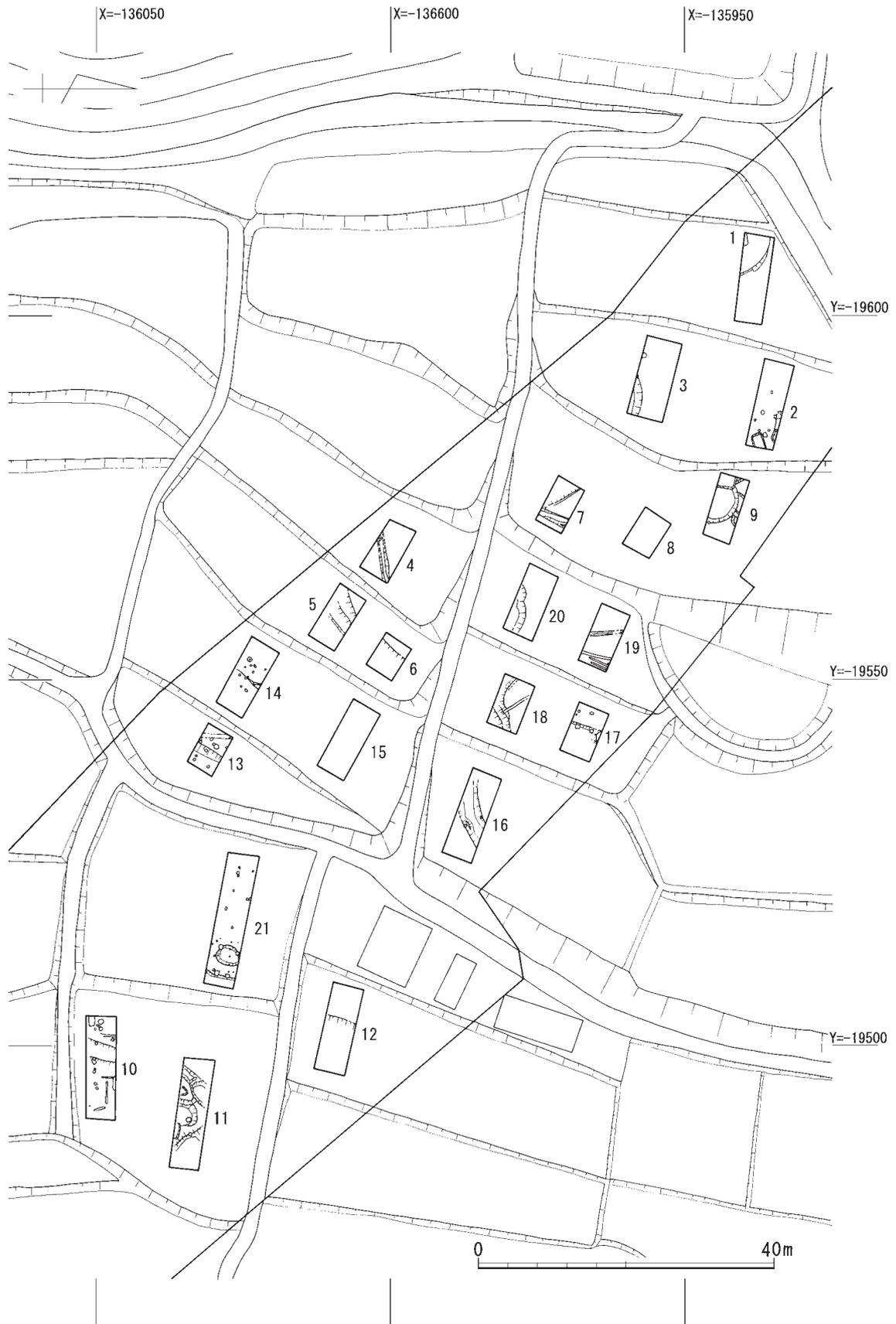
また、畦畔の両側で検出した浅い素掘り溝SD03・SD04はいずれも幅約0.3m、深さ約0.1mを測り、灌漑水路とみられる。水田土壤は黒灰色粘質土であり、遺物の出土はみられない。水田の時期は不明である。ただし、上層の淡灰色砂質土には中世頃の土師器の破片が出土している。

## 2. まとめ

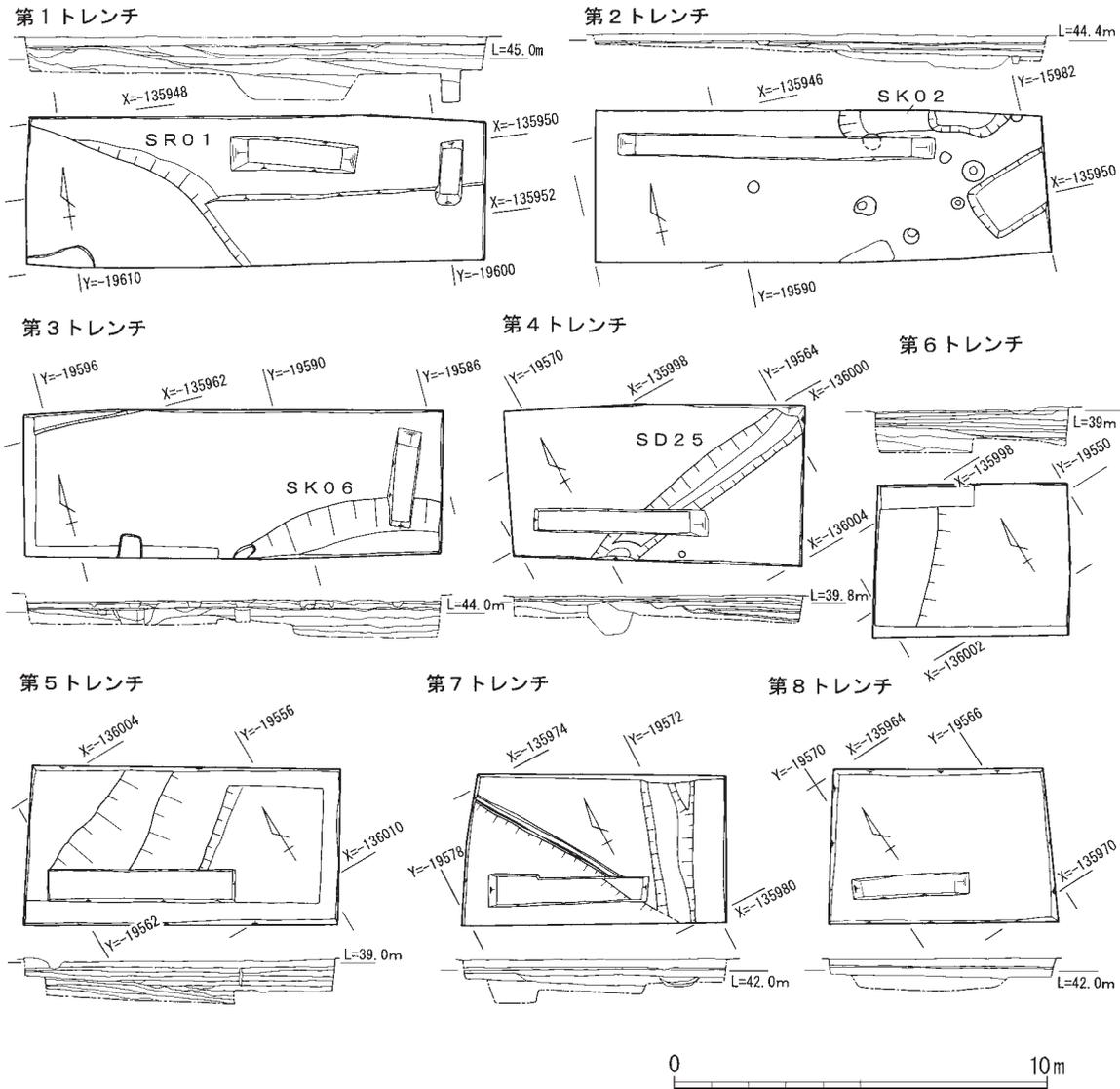
片山遺跡では遺跡南部の2か所で調査を行ったが、時期不明の水田跡と中世の条里関連溝SD01・SD02を検出した。条里関連溝は座標軸に揃うが、水田畦畔は北から東に約7°振っている。第2トレンチ検出の水田跡はその方向性から、第1トレンチ検出の条里溝との関連性は薄いと判断される。

## (3) 下馬遺跡

### 1. 調査の経過及び各トレンチの検出遺構



第15図 下馬遺跡トレンチ配置図



第16図 下馬遺跡トレンチ実測図1

調査対象地は西側丘陵の裾部に広がる扇状地に位置し、東に下る階段状の棚田が広がる。今回は調査対象地の水田と畑地に21か所のトレンチを設定した。トレンチ番号は、調査準備の整った地点から調査を開始した都合上、任意な配置状況となった。調査開始に当たっては表土層の掘削に重機を使用した。その後は人力による掘削及び精査を行い遺構と遺物の検出に努めた。なお、周辺の道路事情から、重機はミニ・バックホーを使用した。また、トレンチは東に向かって下る地形に対し、主として直交方向(東西方向)に主軸を向けたトレンチ設定を行った。トレンチの幅は4mを基本とした。

1) 第1トレンチ 調査対象地の西端部、丘陵裾部の水田に設定したトレンチで、全長は12.5mを測る。トレンチ西端部では地表下約0.3mで淡黄灰色砂質土が広がり、この層は東に向かって緩やかに下る。精査によって自然な流路と判断する流路SR01の南西岸を検出した。流路幅に関しては、北東岸がトレンチ外となることから確認できない。検出範囲では幅約8mを超える規模

である。部分的な断ち割りを含め標高約44mにあたる地表下1.8mまで掘削したが、底面まで到達に至らなかった。流路S R01の上層部分は黄灰色系砂質土層、下層では淡緑灰色砂質土の堆積がみられた。遺物の出土はみられない。

2) 第2トレンチ 第1トレンチの東側下段の水田に設定した。トレンチの全長は約12mである。遺構面はトレンチ西端で標高44.4mにあたる地表下0.3mにあり、東に向かってやや下る。トレンチの東半部分から、柱穴・瓦溜りS K02・土坑等を検出した。瓦溜りS K02は部分的な検出であることから全容は不明であるが、土坑状の落ち込み部分から、平瓦・丸瓦に混じって瓦質播鉢の破片が出土した。瓦には布目・縄目タタキの平瓦を含むが、多くは14～15世紀の中世瓦であり、播鉢も同時代とみてよからう。柱穴の検出状況から、周辺部に建物跡が存在する可能性が高い。

3) 第3トレンチ 第2トレンチの南に設定したトレンチである。西南部壁面付近で柱穴と判断する方形掘形1基と、南東部から大形土坑の一部かと判断する土坑S K06を検出した。土坑S K06は約5.5mの検出長を測り、深さは約0.3mで底面は平坦である。土坑S K06に伴う遺物の出土はみられない。

4) 第4トレンチ 第3トレンチから南東方向に約40m離れて設けたトレンチであり、全長は約8mを測る。遺構面は東半分が階段状に約0.3m程度下がる状況と遺物出土状況から、中世頃には、さらに小幅の棚田地形が存在していたとみられる。検出遺構としてトレンチを西から東方向に斜めに横断する素掘り溝S D25がある。溝S D25は幅約1m、深さ0.8mで、断面形は「U」字形を呈する。埋土は灰色粗砂であり、遺物の出土はみられない。遺物包含層から中世土器の出土をみている。

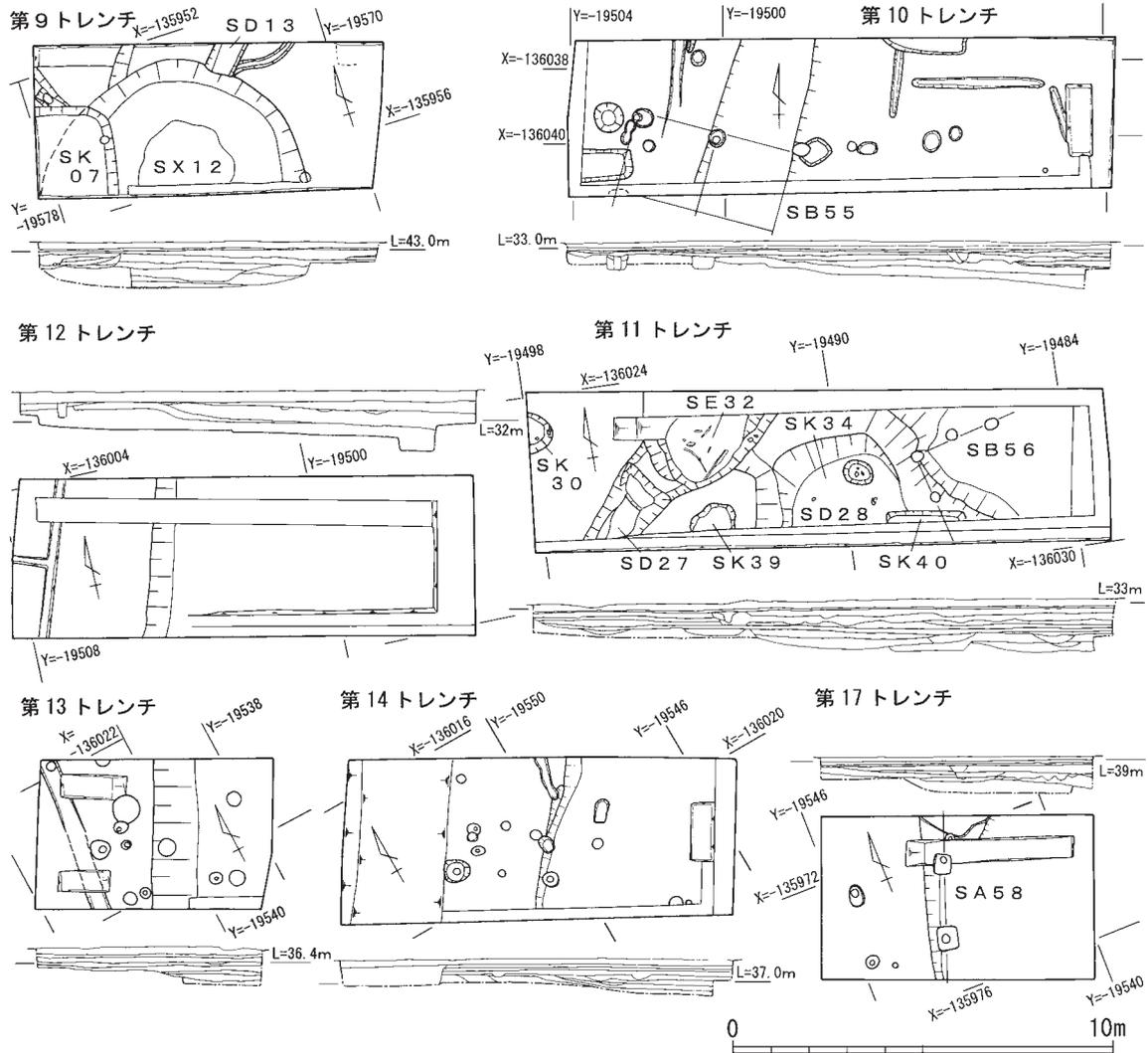
5) 第5トレンチ 第4トレンチの東側下段に設けたトレンチである。全長は8.5mを測る。南東方向に下る安定地面を検出したが、遺構の存在は確認できない。上層では中世土器に混じって平瓦の出土もみた。

6) 第6トレンチ 第5トレンチの北東にやや離れて設けたトレンチで、全長は5mを測る。第5トレンチと同様に遺構の検出はみられないが、中世遺物の包含層が存在した。

7) 第7トレンチ 第4トレンチの東側下段に位置し、第3・第4トレンチのほぼ中間に設定したトレンチである。標高41.8mにあたる地表下約0.3m付近で遺構面を検出した。自然流路とみるS R16の北東岸がトレンチの中央部を斜めに横断する。また、トレンチ東部から耕作に伴う素掘り溝を検出した。耕作溝が自然流路S R16に切り勝つ。自然流路S R16は断ち割り調査を行ったが灰色系の砂が厚く堆積し、検出面下約0.8mでも底面に達しなかった。自然流路S R16では遺物は出土していない。遺物包含層中から平瓦・丸瓦の破片が10数点出土した。

8) 第8トレンチ 第7トレンチの北側に設けた全長約6mのトレンチである。標高42m付近に安定面を検出したが、遺構と遺物は確認できなかった。

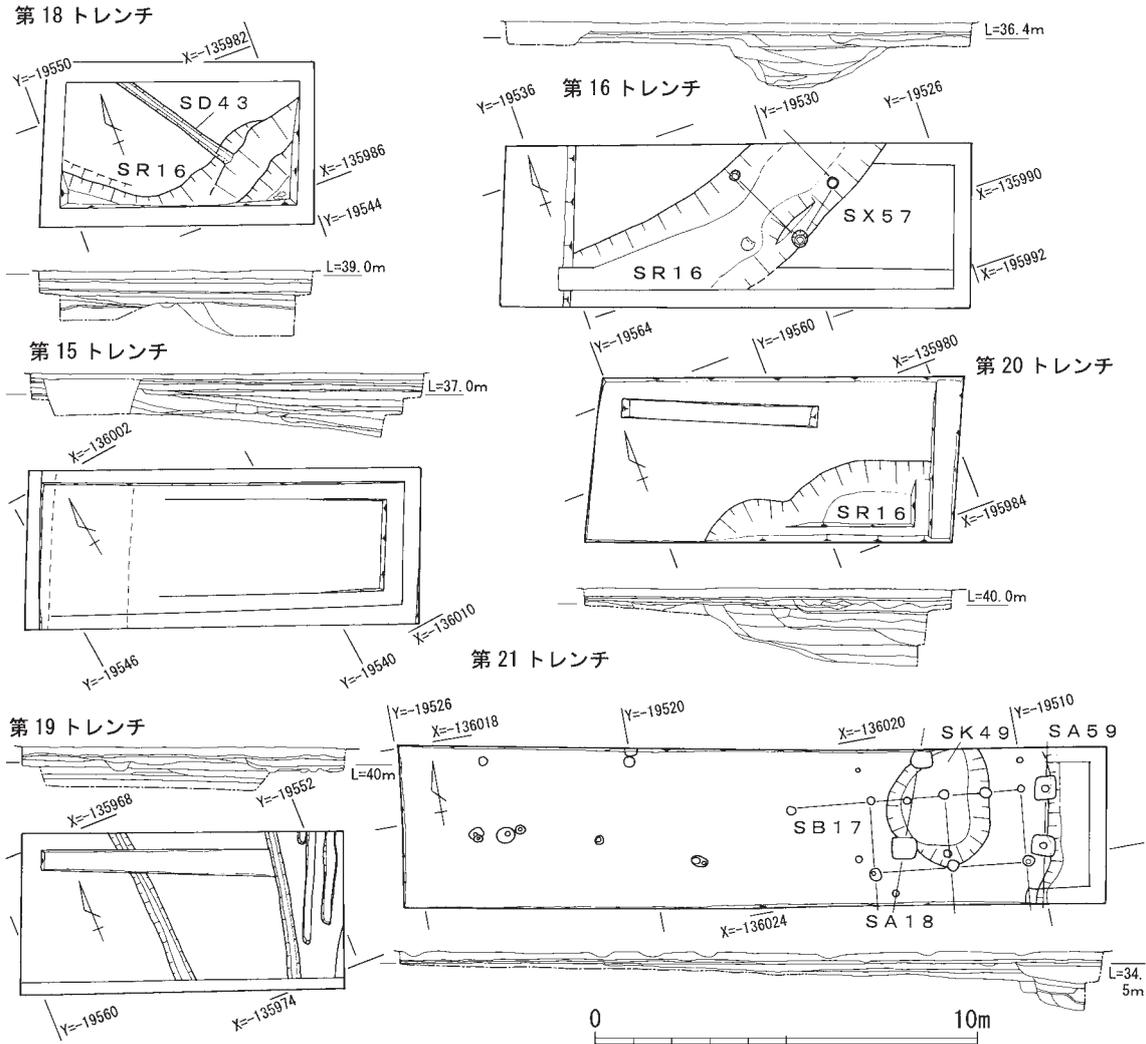
9) 第9トレンチ 第2トレンチの東側下段に設けたトレンチであり、第8トレンチからは北西側1段上部に位置する。トレンチの全長は9mを測る。トレンチ内では緩やかに東に下る標高



第17図 下馬遺跡トレンチ実測図2

42.7~43mの遺構面から、性格不明の土坑SK07・土坑SX12及び素掘り溝を検出した。土坑SK07・土坑SX12は切合い関係があり、土坑SX12が土坑SK07に先行する。土坑SK07は方形土坑の一部とみられるが、深さは約0.3mで溝底は平坦である。埋土中から中世瓦の出土をみている。土坑SX12はトレンチのほぼ中央にあって、直径約7mの半円形相当部分が検出された。円形土坑である場合は南側半分がトレンチ外に位置することになる。土坑中央部が最深部となり、同地点は検出面から約0.6m下がっている。埋土上層は砂質土であるが、下層部分は暗灰色粘質土が堆積する。上層下部から中世土器・瓦等の遺物の出土をみた。

10) 第10トレンチ 調査対象地の東南端部の水田に設けたトレンチである。トレンチの全長は14.5mを測る。トレンチ西端部では遺構面が地表下0.3mにあり、東端部では標高31.8mにあたる地表下1.3mにあり、東に向かって次第に下る。遺構面上の遺物包含層はトレンチ西端部には存在せず、中央部から東側にかけて厚みを増し、瓦器塚等の土器を含んでいる。遺構面の削平を受けたトレンチ西部から柱穴・土坑の検出をみた。柱穴の検出状況からみて、総柱建物跡と想定する掘立柱建物跡SB55が1棟存在する可能性が高い。掘立柱建物跡SB55は北から東に約16°振



第18図 下馬遺跡トレンチ実測図3

り、柱穴内から瓦質羽釜が出土した。

11)第11トレンチ 第10トレンチの北側に位置する。トレンチの全長は15mを測る。ここでは、掘立柱建物跡1棟(SB56)・溝2条(SD27・SD28)・井戸1基(SE32)・土坑4基(SK30・SK34・SK39・SK40)など、特に多くの遺構の集中がみられた。掘立柱建物跡SB56の方位振り角は北から西に約15°を測り、東西2間・南北1間分を検出した。建物の全容が判明しない状況から、建物主軸は不明な点が多い。溝・井戸及び土坑の埋土中から土師器・瓦器等の遺物が出土した。遺物は概ね12世紀後半～13世紀の年代観を示している。

12)第12トレンチ 第11トレンチの北側、1段下がった水田に設けたトレンチである。耕作土直下には砂礫層が厚く堆積し、耕作関連の暗渠以外の遺構は確認できなかった。また、遺物も出土していない。当該地は後世に大きく削平を受けた可能性が高い。

13)第13トレンチ 第5トレンチの南西側2段下がった水田に設けたトレンチである。遺構面は緩やかに東方向に下り、10数個の柱穴を検出した。包含層から、8世紀後半～12世紀の遺物が出土した。

14) 第14トレンチ 第5・第13トレンチ間に位置する。トレンチの全長は約10.5mを測る。トレンチ西端では埋設送水管の攪乱がみられたが、トレンチ中央部から第13トレンチと同様に多くの柱穴を検出した。

15) 第15トレンチ 第14トレンチの北側に位置する。東に向かって下る安定地面を検出したが、顕著な遺構や遺物は検出できなかった。

16) 第16トレンチ 第15トレンチの北東に位置する。トレンチ中央部を西から東に下る自然流路S R16と橋脚とみられる柱穴S X57を検出した。自然流路S R16は幅約3m、深さ約1.2mの規模を測り、底面付近から8世紀後半の須恵器・土師器の出土をみた。自然流路S R16の両岸斜面から3ヶ所の柱穴を検出した。柱穴は直径約0.3mで深く掘り下げられている。柱穴の配列状況から、橋脚である可能性が高い。

17) 第17トレンチ 第16トレンチの西側上段に位置する。遺構面は東に下り、中央付近から方形と円形の掘形をもつ柱穴を検出した。このうち、方形掘形の柱穴で構成される柵S A58の柱間間隔は約2.1mを測り、その軸線は北から東に約20°振る。掘立柱建物跡もしくは柵の一部とみられる遺構である。

18) 第18トレンチ 第17トレンチの南に位置する。南壁付近から第16トレンチで検出したS R16の続きと考えられる自然流路の北岸部分を検出した。この北岸部は大きく蛇行する状況にある。トレンチ南東隅部の流路底面付近から、木製の盤が出土している。

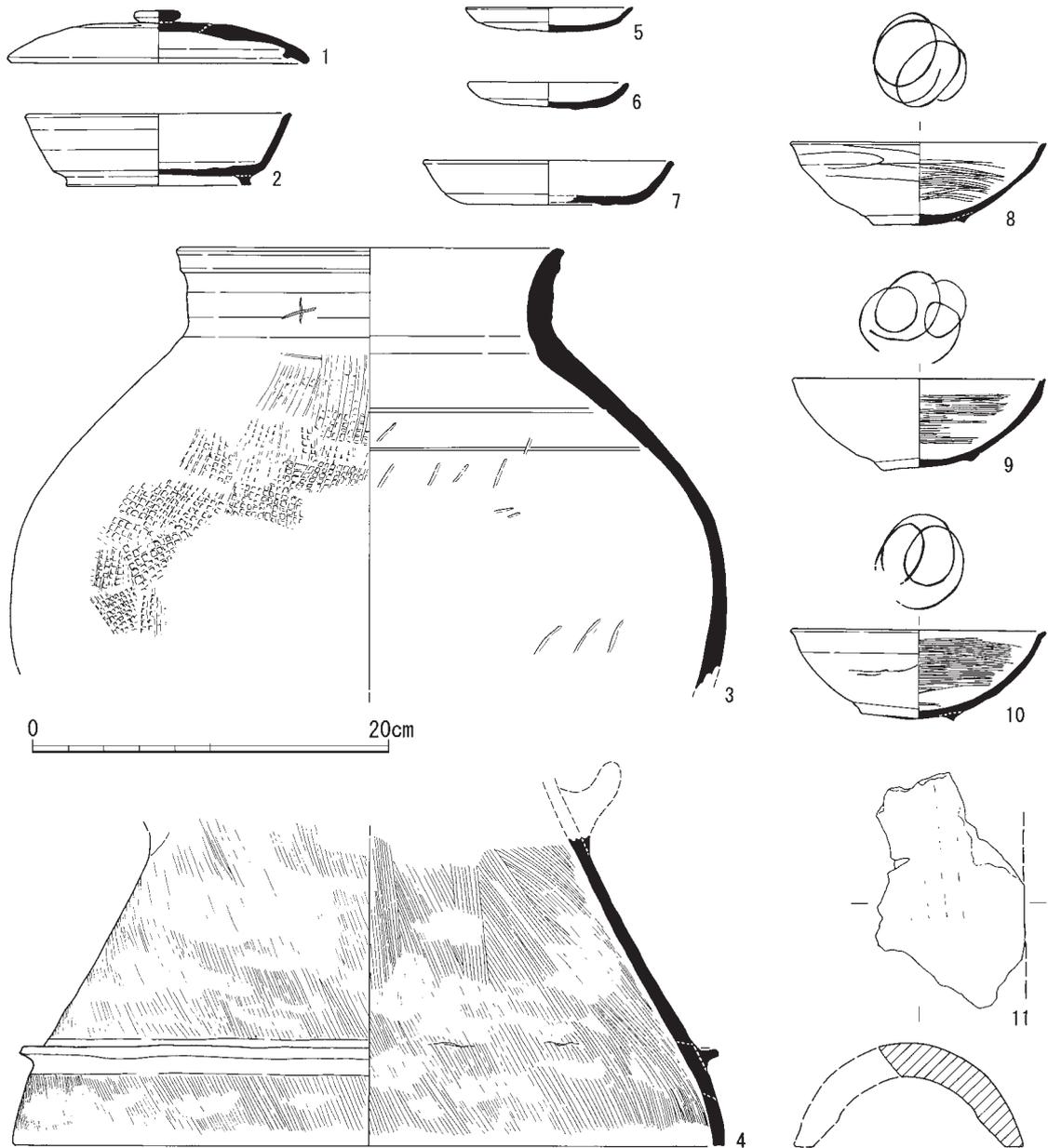
19) 第19トレンチ 第8・第17トレンチ間に設けたトレンチである。時期不明の素掘り溝と耕作関連溝を検出したが、遺物は出土していない。

20) 第20トレンチ 第7・第18トレンチ間に設けたトレンチである。南壁面付近から自然流路S R16と考えられる北岸部を検出した。遺物は出土しなかった。

21) 第21トレンチ 第11トレンチの西側上段の畑地に設けたトレンチである。遺構面は西から東に緩やかに下り、トレンチ中央から東端にかけて暗茶褐色の遺物包含層が存在した。トレンチの西部は遺構面が削平を受けたとみられ、柱穴の分布も疎らである。これに対しトレンチ東部では、掘立柱建物跡S B17や柵S A18・柵S A59・柱穴・土坑S K49などの遺構が集中する。土坑S K49は浅い楕円形土坑で、6世紀末から7世紀の土師質の移動式竈が破片で出土した。掘立柱建物跡S B17は比較的小規模な柱穴で構成され、建物軸線は北から東に約5°振る。方形掘形の柱穴が並ぶ柵S A18と柵S A59は建物跡もしくは柵とみられるが、それぞれ異なった遺構と判断される。柵S A18は柱間間隔が約2.4mで、軸線は北から東に約20°の振り角を示す。一方の柵S A59は柱間心々間隔が約1.5mで、軸線が北から東に約12°振っている。また、柵S A18は土坑S K49の埋土を切っている。

## 2. 出土遺物

今回調査では、飛鳥時代から室町時代にかけての遺物が出土している。各トレンチの出土遺物の時代的な傾向は以下のとおりである。第2・第7・第9トレンチを中心とした丘陵裾部では、



第19図 下馬遺跡出土遺物実測図

14～15世紀の瓦質土器・瓦類の出土が多い。また、第13・第14・第16トレンチでは8世紀後半の土器が出土している。一方、遺跡東部の緩傾斜地に設けた第10・第11トレンチでは、椀や皿などの瓦器・瓦質羽釜・土師皿等が出土しており、12世紀後半頃のものだと判断される。

第19図1は、第13トレンチ出土の須恵器蓋である。口縁内側に返りを有し、つまみが付く。口径17.1cm、器高2.9cm。2・3は、第16トレンチ自然流路S R16から出土した須恵器の杯Bと壺である。2の杯Bは口径15.0cm、器高4.2cmである。3の壺は、口縁部がやや外反気味に短く立ち上がり、端部外面がやや肥厚して面をもつ。体部外面は格子目タタキ、内面は青海波文がわずかに残る。口径21.9cm、体部径40.3cmである。4は、第21トレンチ土坑S K49出土の移動式竈である。体部は上方に向かって極端に窄まる形状で、下端部はやや内湾して終わる。体部外面には、下端の上方約5cmの位置に1本の貼り付け突帯を巡らす。また、下端面から上方約18cmの

位置には把手が付けられていたようである。胎土は良質で、内外面は丁寧にハケメ調整する。下端部の直径は40.1cm、把手下端部での直径は24.6cm、残存部の器高は約18cmを測る。内面には顕著な煤の付着は確認できない。5～11は第11トレンチ溝S D28から出土した。5～7は土師器皿で、8～10は瓦器椀である。土師器皿には小皿と大皿があり、口径9cmと14cmに大別される。瓦器椀は口径14.3cm、器高4.8cm前後で、底部に断面三角形の輪高台を貼り付ける。11は、第7トレンチ出土の丸瓦である。内側には布目痕が残り、外面は幅広な縦ミガキを施す。

### 3. まとめ

今回の調査は、下馬遺跡の性格と範囲確認が主目的として実施した。その結果、21か所のトレンチでは様々な調査成果を得ることができた。

遺跡北西部の丘陵裾部と南東部の扇状地先端付近に、多くの遺構・遺物が集中する状況が確認できた。一方、調査対象地の中央付近は遺構・遺物の分布が少ない傾向にある。これは第16・第18・第20トレンチで検出した自然流路S R16が中央付近を貫く環境から、土地利用が進まなかったとみられる。自然流路S R16では奈良時代後半の遺物が出土したが、後世の遺物を含まないことから、短期間で埋没したようである。丘陵裾部の第2・第9トレンチでは柱穴・土坑を検出しており、瓦も一定量出土しており、周辺部に瓦葺の建物跡が存在する可能性がある。出土遺物から室町時代の寺院関連施設である可能性が高いとみられる。東側下方の第10・第11・第21トレンチでは、平安時代後期の井戸・溝・土坑・掘立柱建物跡等の集落関連遺構を確認した。第21トレンチの土坑S K49や第13トレンチ包含層中から飛鳥時代の遺物が出土していることから、同時期の遺構が周辺部に存在する可能性がある。これらの遺構群は、周辺に所在する里廃寺や下粕廃寺と何らかの関連が予想される。下馬遺跡・片山遺跡では発掘調査を継続して実施しており、さらなる調査成果に期待が寄せられる。

(竹原一彦)

調査参加者は次のとおりである。

調査補助員：大谷博則・後藤愛弓・芝地夏美・永井里佳・原田昌浩・松崎健太・渡辺理気

整理員：井上 聡・寺尾貴美子・羽根 舞・丸谷はま子・中島恵美子・荒川仁佳子・川村真由美・谷上真由美・山川幸乃・田中ゆかり・福島厚子

# 圖 版

鞍岡山 2号墳



(1) 鞍岡山 2号墳調査前全景(北西から)



(2) 2号墳表土除去後墳丘全景(北西から)



(3) 墳丘北斜面畦畔土層断面(北西から)



(4) 墳丘西裾周溝部畦畔土層断面(北から)



(5) 埋葬施設 S X03検出状況(北東から)



(6) 埋葬施設 S X03調査状況(南西から)



(7) 埋葬施設 S X03木棺設置坑検出状況(南西から)



(8) 埋葬施設 S X03畦畔b-b'土層断面(南西から)

鞍岡山2号墳



(1) 鞍岡山2号墳全景(北西から)



(2) 鞍岡山2号墳全景(左上が北)



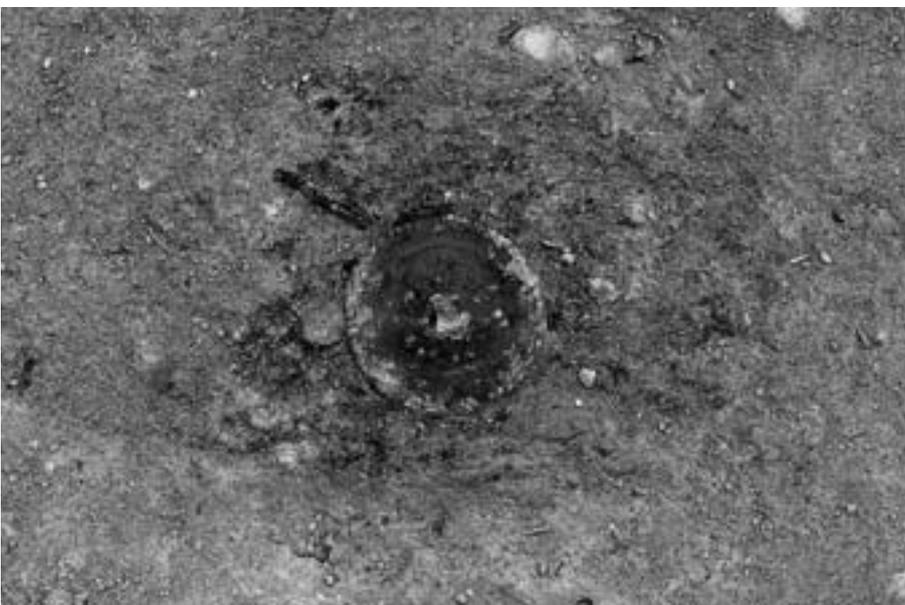
鞍岡山2号墳埋葬施設S X03全景(南西から)



(1) 埋葬施設 S X03 西棺外鉄製品  
出土状況(北西から)



(2) 埋葬施設 S X03 東棺内副葬品  
(四獣形鏡・玉類) 出土状況  
(南西から)



(3) 四獣形鏡出土状況(北西から)

(1) 東棺棺内玉類出土状況  
(北西から)



(2) 東棺棺外玉類(北群)出土状況  
(北から)



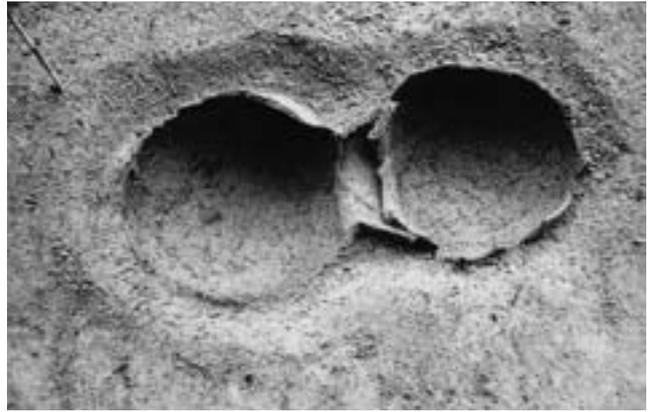
(3) 東棺棺外玉類(南群)出土状況  
(北西から)



鞍岡山2号墳



(1) 土器棺墓検出状況(北東から)



(2) 土器棺上部土器片除去後(北東から)



(3) 土壙墓 S X01 ~ 02 検出状況(北東から)



(4) 土壙墓 S X01 須恵器杯身出土状況(北西から)



(5) 土壙墓 S X01 ~ 03 全景(北から)



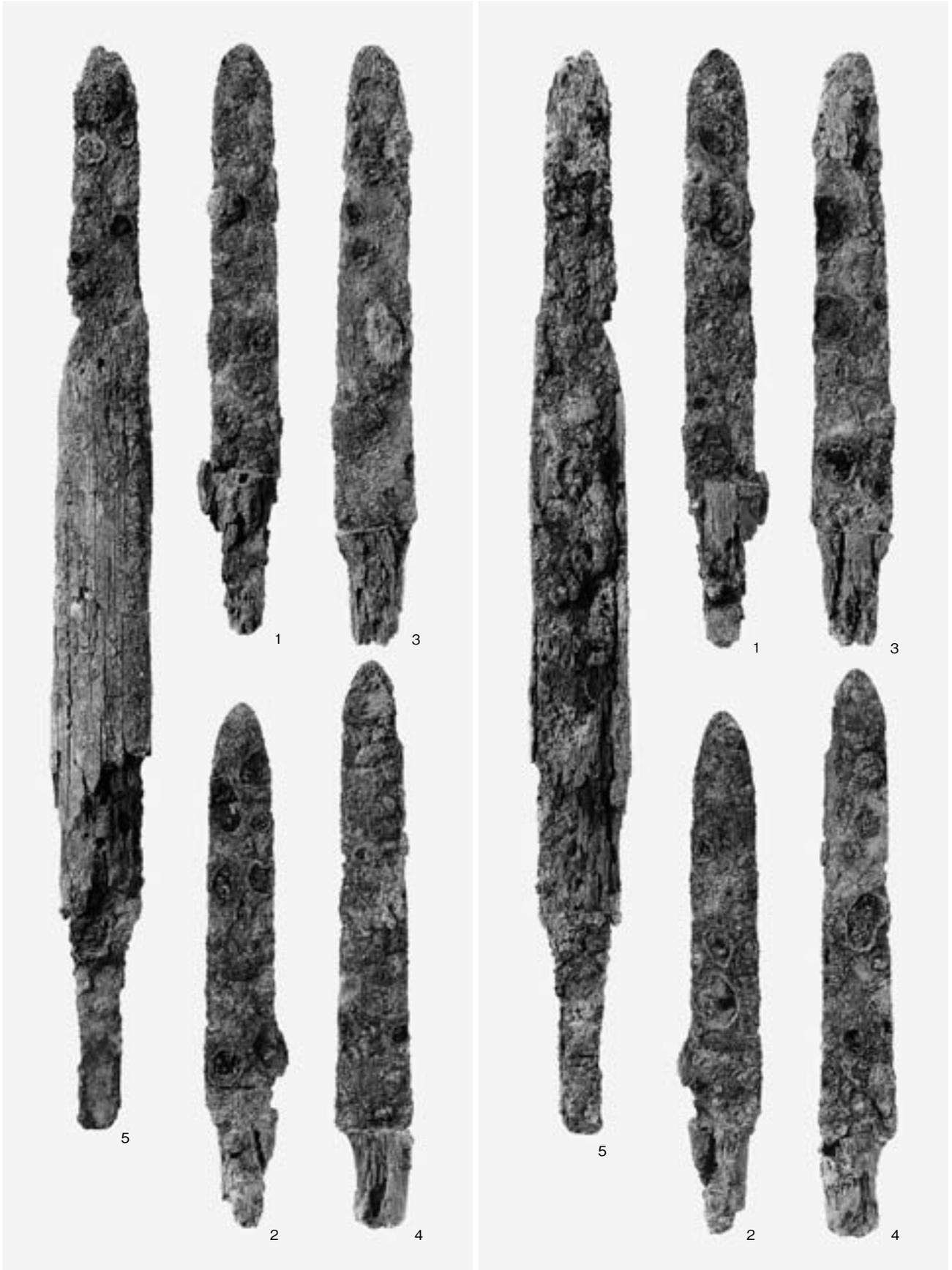
(6) 土壙墓 S X01 ~ 03 全景(北東から)



(7) 2号墳墳丘部土師器出土状況

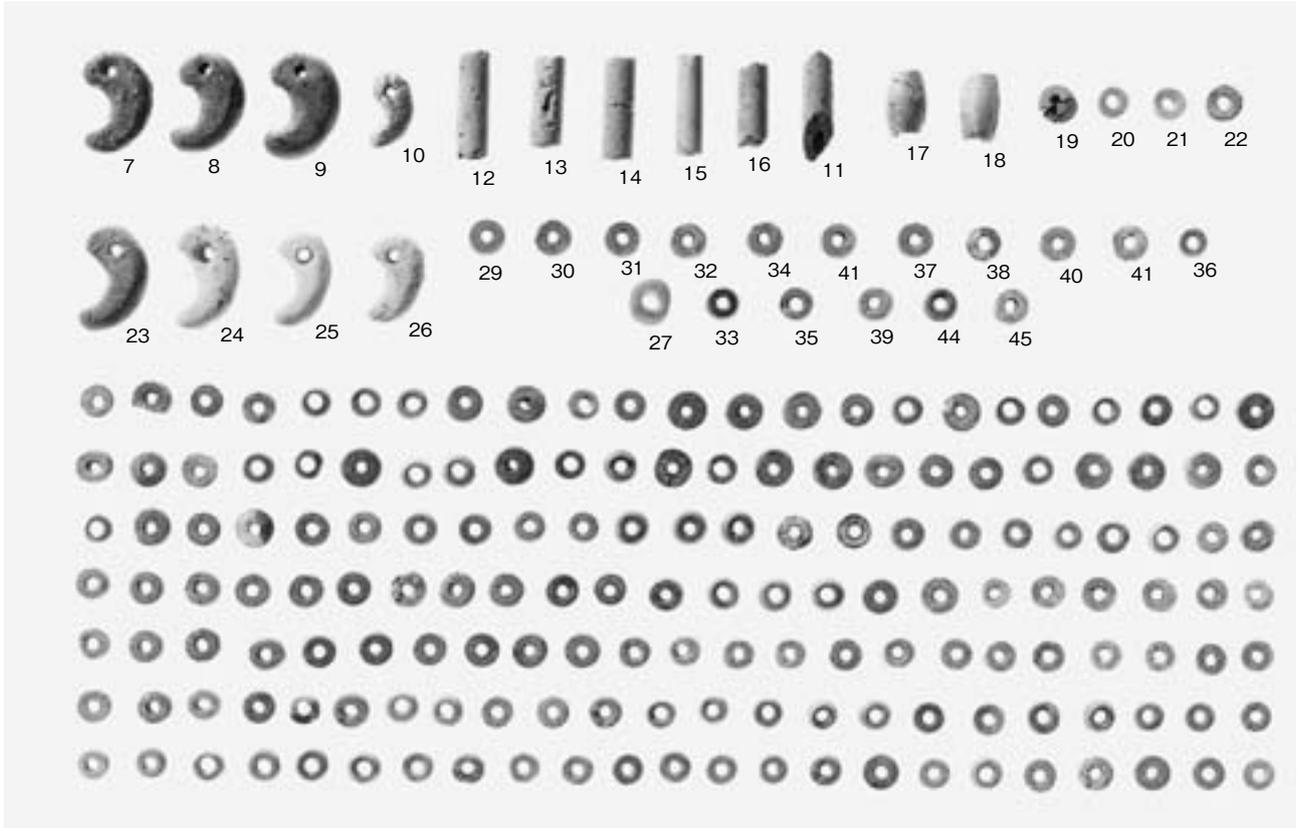


(8) 2号墳墳丘部高杯出土状況



埋葬施設S X03出土金属製品(槍・劍)

鞍岡山2号墳



片山遺跡・下馬遺跡



(1)片山遺跡・下馬遺跡遠望(南東から)



(2)調査地遠景(北西から)



(3)片山遺跡第1トレンチ全景(南東から)



(4)片山遺跡第2トレンチ全景(北東から)



(5)下馬遺跡第1トレンチ全景(西から)



(6)下馬遺跡第2トレンチ全景(西から)



(7)下馬遺跡第2トレンチ東部遺構検出状況(南東から)



(8)下馬遺跡第3トレンチ全景(東から)

下馬遺跡



(1) 第4トレンチ全景(北西から)



(2) 第5トレンチ全景(北西から)



(3) 第6トレンチ全景(北西から)



(4) 第7トレンチ全景(北西から)



(5) 第8トレンチ全景(北西から)



(6) 第9トレンチ全景(北西から)



(7) 第10トレンチ全景(西から)



(8) 第12トレンチ全景(西から)

下馬遺跡



(1) 第11トレンチ全景(西から)



(2) 第11トレンチ溝 S D28、  
土坑 S K34(北から)



(3) 第11トレンチ S K34  
遺物出土状況(北西から)

下馬遺跡



(1) 第11トレンチ東部下層面(東から)



(2) 第13トレンチ全景(南東から)



(3) 第14トレンチ全景(北から)



(4) 第15トレンチ全景(北西から)



(5) 第18トレンチ全景調査状況(北東から)



(6) 第18トレンチ自然流路S R16木製品出土状況(北から)



(7) 第19トレンチ全景(北西から)



(8) 第20トレンチ(北西から)

下馬遺跡



(1) 第16トレンチ全景(北西から)



(2) 第16トレンチ柱穴 S X57  
(北西から)



(3) 第16トレンチ自然流路 S R16  
遺物出土状況 1 (北西から)

下馬遺跡



(1) 第16トレンチ自然流路 S R16  
遺物出土状況 2 (北西から)



(2) 第17トレンチ全景 (北西から)



(3) 第17トレンチ柵 S A58  
(北東から)

下馬遺跡



(1) 第21トレンチ全景(北西から)

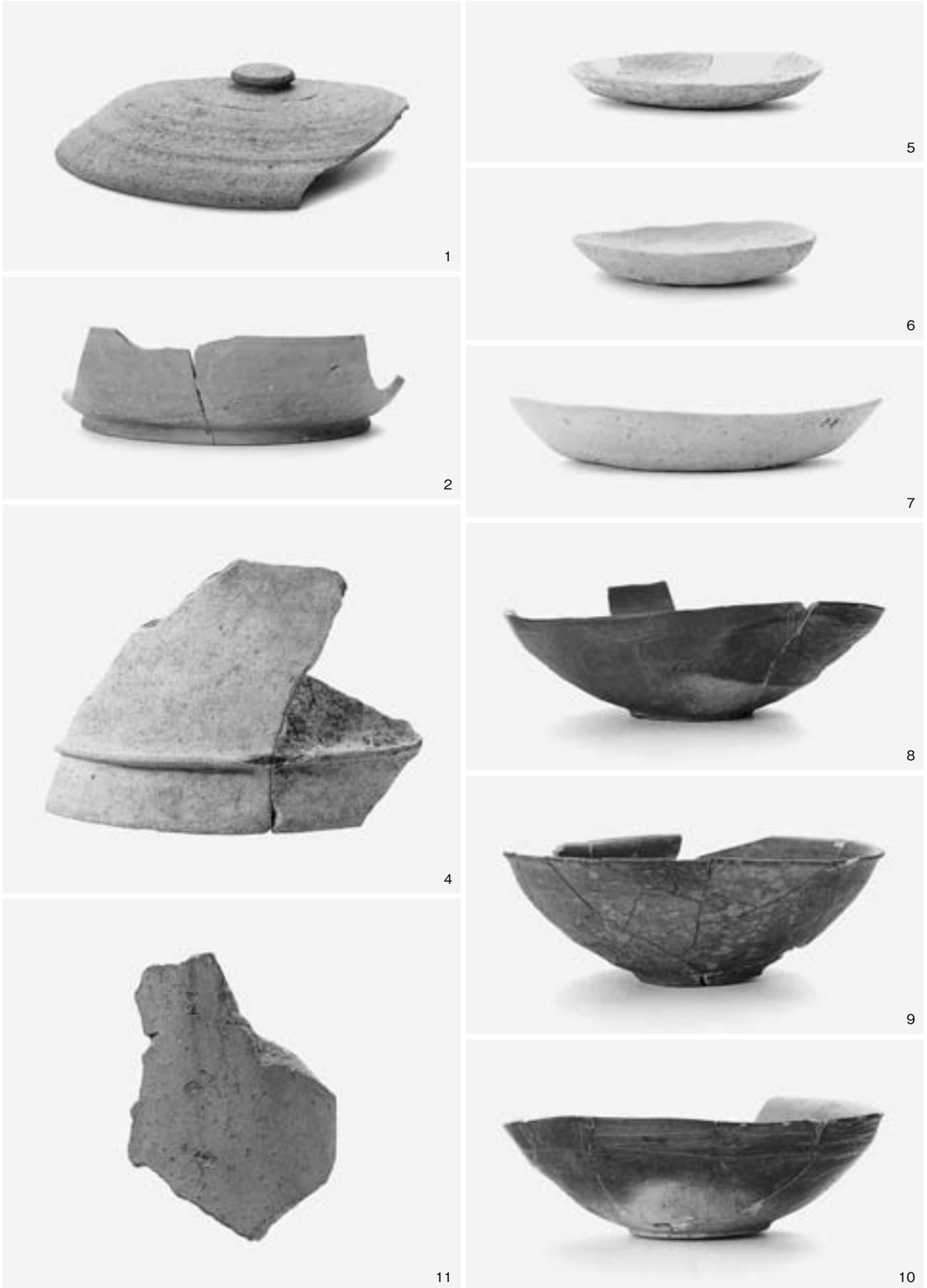


(2) 第21トレンチ土坑 S K 49  
(南東から)



(3) 第21トレンチ柵 S A 18・59  
(南東から)

下馬遺跡



下馬遺跡主要出土遺物

京都府遺跡調査報告集 第 140 冊

平成22年 3 月31日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究  
センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3  
Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189  
<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル  
Tel (075)256-0961(代) Fax (075)231-7141